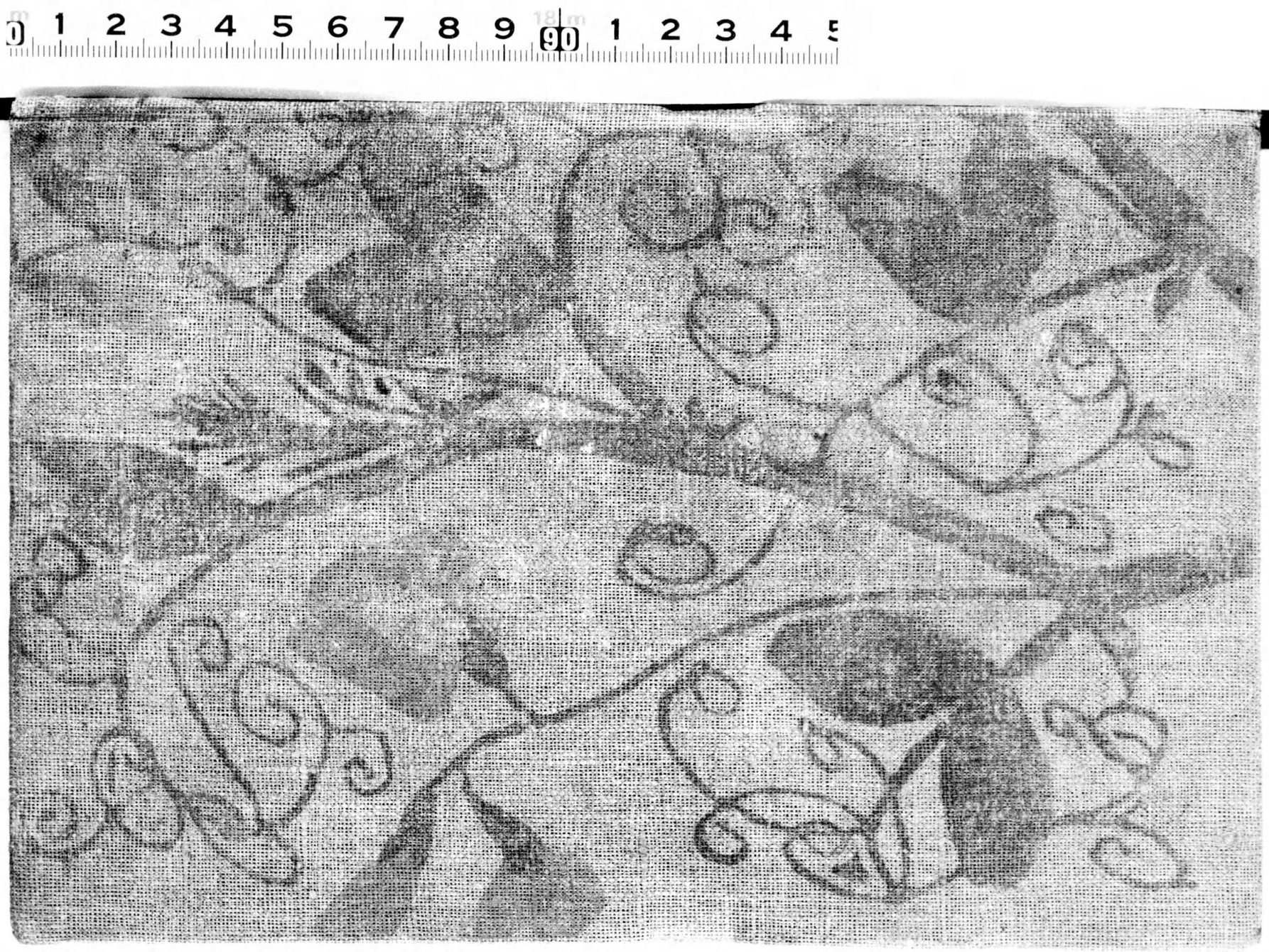


特105
284

大正
3. 5. 20
内交

目次

砂丘　一
良人の家　二五
劇場の夜　五一
わが子　八一
冷たき影　一〇五
母の心　一三一
病める生命　一五一
なりゆき　一七七
露顯　二〇五

砂丘

車中の人　二三一
暮れゆく海　二五七
霧　二八九
月光　二一七
自殺　三四三
母の家　三六五
師走の町　三八七
旅路　四一五
吹雪の夜　四四一
馬橇の鈴音　四六三

一

ゆうべから曉方まで夜ひと夜暴れ狂つてゐた暴風の餘勢もいつの間にか吹き落ちて、灰色に濁つた大空には漸次と迫つてくる黄昏とともに何とも名狀することの出來ぬ不安な靜けさが一面に漂よつて來た。海は見渡す限り蒼黝く澱んで、沖の方で卷き返してゐる波浪だけが眞白な鬣を振り亂す群馬の列のやうに彼方此方で音もなく奔騰してゐる。遠く河口の方まで展がつた荒寥とした砂原にはいつに變らぬ奇怪な姿をした砂丘の群が縱横に起伏して、ゆうべの風で吹き平らげられたその灰色の面には漣のやうな小さな皺が數限りもなく描き出されてゐる。その間には人間の歩み過ぎた氣勢もなく僅かに海鳥の足痕が異樣な曲線を描きながら點々と續いてゐるばかりである。

二箇月の餘も病みあがりの體を此地で靜養してゐる俊子は今日も亦いつものやうに宿屋から砂丘の一つを綴る松林の傍まで歩いて來て、露氣を含んだ砂の上へ腰を休めながら刻一刻に暮れてゆく四邊の光景を眺めてゐた。もう此

頃てはそれがすつかり習慣になつてしまつて、晩餐を濟ますと必ず此處邊へ出て來て、蒼茫として夜色の底に包まれてゆく海や、大空や、砂丘の群を眺めずにはゐられなかつた。自分を取圍むすべての人々から離れて、唯獨りて自由にものを思ふことの出來るのは事實その短かい時間の間だけであつた。

彼女はかうして寂しい落日の影を浴びながら砂漠のやうに荒び果てた一家の有樣や、自分の身の行末などをいろいろに思ひ廻らすのが今では彼女に殘された唯ひとつの慰藉であつた。無限の虚空に連なる大海原を背景に蜿々と斷えつ續きつ起伏してゐる砂丘の姿が彼女にはどうしても自分の寂しい運命を暗示してゐるやうに思はれてならなかつた。寂寞、孤獨、さうした言葉の意味は悉く今の自分の境遇に當て嵌まるやうに思はれて、砂丘の色を眺める毎に彼女の心の底にはかすかな獻欷の聲が充ち渡るのであつた。

彼女は昨夜の暴風のことなどを思ひながら當てもなく四邊を眺めてゐると、今朝東京の良人の許から屆いた手紙の事がふと又心に浮んで來た。その手紙の文面は一言一句皆良人の心が自分から離れ去つたのを證據だてるやうなも

ので、愛の薄れた感情をその儘心から切り取つて卷紙の面へ叩きつけたやうな書き方がしてあつた。

「……二ヶ月に餘る長々の轉地療養は小生が如き貧乏人の到底負擔に堪へざる處に候。若しまだ療養不十分とならば向後は一切その許の勝手たる可し……。」と云ふやうな激越な文言は到る處に散見された。

俊子はその手紙をみたとき、直ぐにも行李を纏めて歸京しようと思つた。併しかういふ手紙を書くほど心の冷たくなつた良人の側に歸つてゆくのが何となく空恐ろしくなつて、一旦決心してはみたものゝやがて又逡巡しはじめた。それに一昨日東京から態々診察に來て呉れた醫師の意見ではまだ彼女の體力が歸京の出來る程度まで恢復してはゐなかつた。腹部の手術をした痕はもう殆んど全癒してゐたが、衰弱はまだ彼女の手にも足にも殘つてゐた。で、彼女は朝からあれかこれかと思ひ惑つて、到頭心を決し兼ねてゐるうちにいつか夕暮になつてしまつたのであつた。

「何うしよう。いつそ思ひきつて歸つてみようか。」俊子は考へあぐねて意味

もなくこんなことを呟いてみた。今朝から思ひ惱んでゐたことがそれと一緒に意地惡くまた心に歸つて來た。そしてもう死灰色に暗くなつた砂丘を眺めながら良人の心の移り變りをさまざまの立場から考へてみた。併し彼女には到底良人の心の底に潜んでゐる虚僞と眞實とを見拔くことは出來ないやうに思はれた。

そんな考へに疲れて、俊子はいつ思ひ起すともなくまた大學病院で手術をして貰つた日の恐ろしい記憶のなかに心を浸してゐた。コロヽホルムの冷たい匂ひと手術後の魂も消えてゆくやうな激しい苦惱！俊子の顏はその刹那、みるみるうちに蒼ざめて、肉の薄い頰が强張つたやうに拘攣つてきた。

その時、ふと氣づくと遠くの方からさくさくと砂を踏む氣忙はしい足音が聞えて來た。そしてぼうつと四邊を罩めた薄闇の底に近寄つて來る人の顏だけがほの白く浮き上つて見えた。それは東京から連れて來てゐた召使のお初だつた。

二

「おや、奥様。こんな處において遊ばしたんですか。私は隨分方々お捜し申しましたんですけど……。」と云つて、お初は息を彈ませながら近寄つて來た。

俊子はそのさまを見ると自分の變な樣子を氣どられまいとして、靜かに立上りながら、

「何か用なの？」と、沈んだ聲で訊いた。

「あの、今麹町の大奥樣がお着きになりましたんです。何んで御座いますか急な御用事があるさうで……。」

「えッお母樣が？」俊子は思ひがけない報らせに吃驚しながら、「まあ、何の御用だらう。たつたおひとりでかい？」

「はい、おひとりで御座います。」お初は呆氣に取られたやうにまだ息をはづませてゐる。

「何の御用だらうねえ。兎に角急いで歸りませう。」俊子は抑へきれぬ驚きを

強ひて押隱さうとしながらそろそろ歩き出した。

「お母樣も隨分變な方だわねえ。被來るなら被來るでちよつと電報でも打つて下されればいゝのにねえ。さうすれば船場までお迎へにもいけるし……。」と、俊子はうわの空で云つてゐたが、心のなかはもうお初の言葉も聞えぬほど混亂してゐた。何か恐ろしい大事件が突發したのではあるまいか、と思ふと氣がそわそわとして、その事件に關聯してゐるらしい良人の顏や、弟の喜三郎の顏などが映つたり消えたりした。そして何とも想像がつかないだけに胸は當もない恐怖に慄へた。

大洗神社の側から道へ上つて、彼等はやがて明るい光の溢れた旅館の前へ出た。金波樓と書いた軒燈をみると俊子は矢も楯も耐らなくなつて、門口から小走りに玄關へ上つた。そして、

「お歸んなさいまし。」と、聲を揃へて迎へる婢達の聲を後に聞き捨てゝ、表階段から二階の角座敷になつてゐる自分の部屋へ驅けつけた。

障子を開けると八疊の床の間の前には母親が唯ひとりコートも脱がずにし

よんぼり坐つてゐた。
「まあ、お母様。何う遊ばしたんです？」俊子は嬉しさに彈んだ聲で云ひながら突如其側へつかつか歩いて行つた。
「おや、歸つて來たね。」母親も嬉しさうに微笑んで「何うしたつて、まあ　ちよつとお前に逢つて急に相談しなければならないことが出來たもんだから。」
「まあ。さうで御座いますか。」俊子の顏はみるみる曇つて來たが「でもそれにしてもちよつと電報でも打つて下されればいゝのに。　私は餘り突然なんで吃驚しちまひましたわ。」
「さうだらうとも。私もさう思はないぢやなかつたんだけど。」と、母親は靜にコートを脱いで、折柄入つて來たお初に渡しながら、「それに私やちつとも旅馴れないから誰れか連れて來ようと思つたんだけど、何しろ急に思ひ立つたものだから。」
「でもおひとりぢや危いわ。東京からぢや汽車だの、船だの、いろんなものがあつて隨分煩いんですもの。」と、云ひながら俊子は母親の顏色を讀まうとして、「そ

んなに急な御用なんですか。」
「あゝ。併しまあそんな話は後の事にしてお前は思つたより元氣が付いてゐるぢやないか。顏色なんか見違へるやうだよ。」母親はまじまじ俊子の顏を見ながら安心したやうに云つた。
「えゝ、お庇護さまで此の二三日大變に元氣づいて參りましたの。もう此の分ならいつても東京へ歸れますわ。」俊子は强ひて調子を張りながら笑つた。
「昨日大瀧さんが此處から歸りに見えてね、どうもまだ十分でないなんて云つて被居つたけど、かうして見る處ぢやもう大丈夫のやうぢやないか。ほんとに體の直つたのが何よりだよ。私や東京にゐてお前の手紙を見る度にそればかり氣に懸つてねえ。」と、しんみり云つたが、急に氣を變へて、茶を入れてゐるお初の方を顧みながら、「ねえ、初や。私に手拭をひとつ貸してお呉れ。鹽湯へ一杯入つて溫まつて來ませう。海岸でゐながら妙にひやひやするぢやないか。」
母親はその儘お初を連れて浴場の方へ下りて行つた。俊子は滅切り年寄つたやうなその後姿をみると、急に眼を濕ませた。

母親は風呂から上つて來ると、今迄着てゐたセルを袷に着換へてさも快よさうな顔つきをしながら夕餐の膳に向つた。久しぶりだと云つて鮮らしい海魚の料理を賞美しながら俊子やお初を對手に東京の家の話や、四方山の出來事を取留めもなく話して聞かせた。

俊子はいつまで待てゐても母親がその急な用事と云ふのを切り出さないので、それがひどく焦燥しかつた。幾度か此方から問ひかけようとは思つたが、召使のお初などに一家の祕事を聞かすのが厭さに到頭最後まで我慢してゐた。母親の眼つきや、口占などを思ひ合はせると、心の底には樣々の空想が漸次と集まつてきて、母親を此樣な遠い海岸まで連れ出してきた理由が朧げながらそれとなく分つてきた。

夕餐が濟むと俊子はさあらぬ顔でお初を階下へ遠ざけようとした。才はぢけたお初はそれと見て取つて、跡仕舞ひをすつかりしてしまうと、態と云ひ憎さ

うにしながら程近い磯濱の町にかゝつてゐる旅役者の芝居を見にやつて呉れと云ひ出した。丁度その晩は宿の婢達も代り合つて行くといふ話を聞いてゐたので、俊子は早速それを許した。そして小遣ひにといつて幾らかの金まで包んでやつた。

母親は俊子と對向ひになると、急に悄れた顔つきになつて、愚痴をこぼすやうな聲で初めて急な用事の一件を語り出した。時々言葉が廻りくどく縺れて意味の分らないやうなことが多かつたが、それでも俊子には母親の頭に宿つてゐる事よりずつと先のことまで分るやうな氣がした。

事件は俊子の考へてゐた通り良人に關したことであつた。母親の云ふ處では良人と俊子との間に殘された道は猶三つも四つもあるやうであつたが、俊子にはもうそれですべてが終つてしまつたやうに思へた。

昨夜遲く良人は酒氣を帶びて母親の家へ訪ねて來たのであつた。丁度今朝の手紙にもあつた通り、餘り療養が長びくので迚も經濟が立ち兼ねるといふやうな事を楯にして、良人はそれとなく夫婦別れをし度いやうな氣振りをみせた

のてあつた。

「それがさ、裏長屋にても住んでゐるやうな者なら右から左に處置も出來るだらうけど、あゝして相當な銀行の取締役までしてゐながら、何んな顔をしてそんな馬鹿なことが出來るだらう。それに入費が嵩むと云つたつて、月に二百圓も三百圓も入る譯ぢやなし、私にや何うしても時之助さんの氣が分らないんだよ。」

母親は漸次と興奮して來て、もちまへの頬を紅くしながら云ひ續けた。

それまでぢつと俛首て聞いてゐた俊子はふつと蒼くなつた顔をあげて、

「そりや私にやよく分つてゐますわ。あの人はもう私が厭になつたんです。お母様にやまだお話しなかつたけど、私が愈入院すると決つた時にもそんな事を云つてゐたんですもの。」

「だつてそれぢや餘り薄情な話ぢやないか。貰ふ時には遣らないと云ふのを無理に貰つて置きながら、今になつてそんなことを云ひ出すなんてあの人にも似合はないことぢやないか。」母親は俊子の胸のなかを探るやうな眼つきをしたが、やがて急に調子を落として「私の考へぢやこれにやまだ別な理窟があると

思ふんだよ。お前のまへでこんなことを云ふのは厭だけど、實はあの人も此頃大分惡い遊びをするらしいんだよ。」

「それも私よく知つてますわ。今始まつたことぢやないんですもの。」俊子は嘲るやうな聲で云つた。

「まあ、さうかい。私やあの人ばかりは堅い人だと思つてゐたのに。」母親はてれたやうに云つて、俊子の顔をもう一度ぢつと見た。

「堅い人なもんですか。私が嫁く前には隨分亂暴をやつたらしいんですよ。私やつと此頃になつてそれを知つたんですけど。」俊子の心には結婚してから二年の間に起つたさまざまの出來事の記憶が甦へつて來た。

四

世間見ずのお嬢様で育つた俊子にはその頃男が遊蕩の巷で何んな惡行をするものか、分つてゐるやうでその實分つてはゐなかつた。さういふ巷に住む女は皆惡鬼のやうに思はれ、そこへ出入りする男は放埒な、野卑な、そして心の腐れ

果てた者ばかりであることだけは自然に見聞きして知つてゐた。そして偶に藝者などの姿を見かけることがあると、一途にその醜さが眼について、彼女は心から彼等を賤しみ憎んだものであつた。

良人が夜遅く酒臭い息を吐きながら歸つて來るやうなことがあつても、彼女は彼がさうした灯の紅い街燈やかな街から歸つて來たものとは少も信じなかつた。良人の醉つた唇から藝者の噂や、さうした種類の女達が男を操す術などを笑談まじりに話されても、彼女は唯卑しい戯れとしてそれを聞き流してゐた。そして結婚してから丁度一年ばかり經つた後、良人が惡性の病を受けてこつそり病院通ひをしてゐるのを知つた時、彼女は初めて良人の今迄の身持ちに關するすべてのことを知つたのであつた。

俊子にはその時になつて漸う遊蕩の巷がどんなものであるかと云ふことが分つて來た。今迄は自分に何の關係もない遠い世界で、花のやうな粉飾を凝らしながらめいめい好き勝手に振舞つてゐるとばかり思つてゐた女達が、俄に彼女自身の敵として眼の前に立現はれて來た。そして良人の心のなかにも淺猿

しい獸性が潜んでゐるのを知ると同時に、彼女は嘗つて覺えぬ激しい憎惡と嫉妬とを一時に感じたのであつた。

俊子は其當時の苦悶を浮べると、今てさへ冷汗の出るやうな惡感を覺えることが多かつた。何うにかして良人の心を飜へさせようと思つて、種々さまざまな手段を講じたが、却てそれが彼の惡行を增長させる種にさへなつた。彼女は幾度かその爲めに泣いた。そして今度の大病も原因は良人にあることを醫師の口から薄々聞き知つた時、彼女は自分の體までが救ふことの出來ぬ墮落の底に沈んでしまつたやうな氣がして、手術後の當夜などはベッドの上にぢつとしてゐられない程の惡感に慄へた。

俊子は過ぎ去つたことゞもを思ひ返してゐる間に眼の眩むやうな不安が迫つて來て、母親の方を顧みながら、

「それでお母樣は何て返事をなすつたの？」

「格別返事の仕樣もないぢやないか。何か此方に落度でもあるんなら何んだけど、唯病氣をした位で夫婦別をするなんてまるで理窟に外れてゐるぢやない

か。それに雙方の名譽を考へたつて今そんな莫迦な眞似が出來る譯はありません。」

「だけど、私も今度の病氣ぢや隨分時之助にも迷惑を掛けてますし、それに此樣な體ぢや此の先どうなるか分りませんものねえ。」俊子は嘆息を吐くやうな調子で云つた。

「だからさ、私が態々相談に來たのはそこなんだよ。時之助さんの方で何うしても手當が出來ないといふんなら、此れからさきの療治は宅の方でしたつていいし、體の方は何も今度のことの云ひ掛りにはなりやしないんだよ。唯お前の心持ちが何うなのかそれが聞き度いのさ。」

「私の心持ちつて別に變りやしませんわ。一旦あの人の處へ嫁いで見ればもう私の體ぢやないんですもの。」

「お前はほんとにさう思つてゐるのかい？」母親は疑ひ深い眼つきで俊子の眼のところをぢつと見た。

俊子はその視線を避けるやうに側を向いたが、やがて勢ひのない聲で

「だけど外に考へやうはないぢやありませんか。私だつて今迄に隨分辛い思ひもしましたけど、此頃ぢやすつかり諦めてしまひましたわ。」

五

「それが可けないんだよ。そんな氣の弱いことを云つてゐるから時之助さんが身勝手な眞似ばかりするのさ。もうちつとしつかりして、かうと思つたことはお終ひまで遣り徹す氣でゐなけりや迚も駄目だよ。」母親は柔いなかに何處か聞かない氣のある調子で云つた。

「でも、私にやとても駄目ですわ。いくら心で思つても、時之助の前へ出るとそれが出來ないんですもの。」

「だつて夫婦ぢやないか。それぐらゐ氣を引緊めてゐなけりや一家を立てゝ行くことは出來やしないもの。」と云つて母親はその儘まじまじ俊子の顏を眺めてゐたが、何を思ひ出したのか急に聲を低くして、「喜三郎にしろ、お前にしろ、宅の者たちは何うしてかう氣が弱いんだらう。せめてお父樣の半分でもしつか

りしてゐて呉れるといゝんだけど。」

俊子の心にはその言葉と一緒に亡き父の面影が浮き上つて來た。もう六年の昔、丁度俊子が十六の年に彼女の父は自分の勤めてゐた皇室所管の官省で不正事件の起つた際、その咎を一身に引受けて悲壯な自殺を遂げてしまつたのであつた。其事は世間にはまるで知れてゐなかつたが、父を知る人達は今でも密かにその人格を追慕して止まなかつた。剛愎で、果斷で、寧ろ苛酷に過ぎる位嚴格な人であつた。俊子は朧げに覺えてゐるその廣い額や、引き緊つた唇を思ひ出すと、自分のことからたつたひとりの母親にかうまで勞苦を與へてゐるのが情ないほど氣辛くなつて、急に居坐ゐをなほしながら、

「兎に角、私明日歸京りませう。その上で時之助にも逢つてよく話を聞くことにしようぢやありませんか。」

「だけど、よくお前の方の心をきめていかなけりやいくら歸つたつて駄目ぢやないか。それに體だつてまだほんとに快い譯ぢやなし……。」

「いゝえ、大丈夫ですわ。そんな事を云つて愚圖々々して居る時ぢやないんで

すもの。私はどうしても明日歸ります。」俊子は堅く決心したやうに妙に氣負つて云つた。

「そんならさうするが可い。その方が話が早く極つて都合は可んだから。」母親は考へ深い顏つきになつて、それなり口を噤んでしまつた。

戸外ではまた少し風が動き出したとみえて、すぐ下の岩礁の多い濱邊からは、吠える樣な怒濤の聲が地響を打つて聞えて來た。裏山の祠の森で騷ぐ風の音はその絶え間絶え間に遠く聞えて、雨戸に吹きつける砂の音がまるで雨の樣にさらさらと喘ぐ。それとともに夜寒が何處からともなく犇々と迫つてきた。

俊子は明日久々で良人に逢ふ場面や、それからこの先自分の身がどうなつて行くだらうといふやうなことを取留めもなく考へだした。捕へどころのないやうな悲しみと不安の念はすべての考へを漸次と暗く彩つていつた。そして良人に逢ふことはいかにも氣拙かつたが、久し振りで歸るのかと思ふと東京の空が急に慕はしくなつて來た。

そこへ階段の方で靜かな足音が聞えてやがて番頭が一通の手紙を持つて入

いて來た。

六

また良人からの手紙かと思つて急いで取りあげてみると、裏書きには思ひもかけぬ杉浦の名が書いてあつた。杉浦といふのは麹町の實家のすぐ近くに邸を持つてゐる資産家の次男で、俊子はその妹の夏子と學校友達であつて、同時に彼とも幼馴染の親しい間柄であつた。偏屈らしい躍つたやうなその字體を見ると、彼女はしみじみ杉浦が懷かしくなつて直ぐにも封を切つて讀まうとしたが、なんだか母親の手前が妙に氣拙いので、その儘床の間の上へ投げあげてしまつた。

「誰れから來たんだい？」母親はその容子をみると怪しむやうに口をきつた。

「いゝえ、杉浦の毅さんから來ましたの。いつも面白いことばつかり書いて來るんですよ。」俊子は强ひて笑ひを作りながら答へた。

「まあ、さうかい。度々手紙を下さるのかい？」

「いゝえ。月に一度ぐらゐですわ。」俊子は此地へ來てからもう五度も受取つた杉浦の手紙を何故か母親に隱した。

母親は格別氣にもとめてゐないやうな調子になつて、

「あの人も今度愈〳〵結婚なさるさうぢやないか。此間夏子さんのお話しぢや相手の女も大概きまつてるやうな容子だつたよ。」

「まあ、さうですか。私の處へは何とも書いて來ませんのよ。どうなすつたんだらう。きつと恥かしいんですわねえ。」俊子は口では快活に云ひながら眉のほとりに氣がかりらしい疑念を現はした。

「なんても相手は華族のお嬢さんで、大變綺麗な女だとか云ふ話だよ。彼家いらは何と云つても家柄がいゝんだから、何ないゝ家のお嬢さんでも貰へらあね。」

「さうねえ。だけど毅さんは變り者だから、うまく落着けばいゝんですけど。」俊子は杉浦のことを思ひ浮べながらうはの空で答へた。

話はそれて濟んでしまつた。

いよいよ明日歸京すると決まると俊子はうかうかしてゐられないやうな氣

持ちになつて、そこらに取散らかした手廻はりのものなどを整理しはじめた。そして婢を呼んで次の八畳へ臥床を敷べさせて母親を先へ寝ませた。何かのことは明日の朝仕度するとしても、今夜のうちに手配りだけはして置かなければならないので、俊子はお初の歸りを待ちながら、火鉢の側にしよんぼり坐つてゐた。

母親は一日の旅路と氣苦勞とに疲れ果てゐるとみえて、横になると間もなくすやすや寐息をたてはじめた。俊子は母親の睡入つたのを見澄ますと、やがてそつと立ち上つて、床の間から先刻の杉浦の手紙を取つて來た。そしてもの音を忍ぶやうにこつそり封をきつて明るい洋燈の光で一氣に讀み下した。

中には格別取留めたことも書いてなかつた。結婚のことはもとより、さうした華やかな生涯の轉化に關したことは唯の一行も書いてはなかつた。彼はいつものやうな飾りけのない筆で漸次と妙な方へ沈んでゆくこの頃の心持ちを思ひついた儘に書いてゐた。世の中や、自己といふものが分つて來るにつれ、限りない寂しさを覺えるといふやうなことが繰返し繰返し書いてあつた。而も

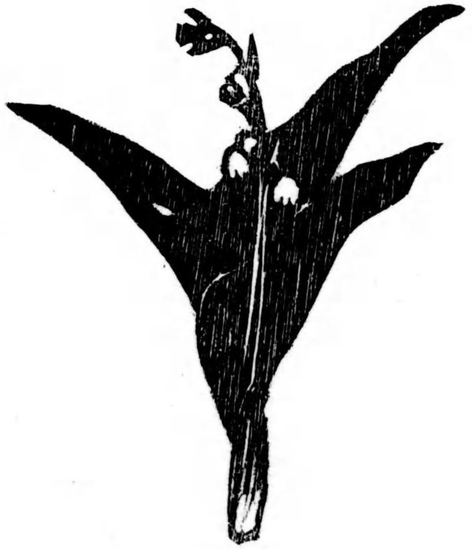
それは姉妹や、戀人に與へるやうな調子ではなく、ひとりの男性の友を對手にして訴へてゐるやうな粗雜な筆つきで書いてあつた。

俊子には杉浦の考へてゐることがよくは分らなかつたが、眞實寂しさうな氣持ちがその一句一句に滲んでゐるやうに思はれて、彼女はいつになく心を惹かされた。二度三度と讀みかへしてゆくうちに、杉浦が自分に對して何ものかを求めてゐるのではあるまいかといふやうな氣が頻りにして來て、その求めてゐるものと、自分が今又何かに向つて動いてゆかうとしてゐるものとが暗々裡に冥合してゐるやうに思はれてならなかつた。

「毅さんはほんとうに結婚するんだらうか」。俊子は初めて手紙から眼を離しながら心の底でかう呟いたが、その時ふと胸に襲ひかゝつて來た淡い恐怖とともに譯も分らぬ悲しみが心の底からじりじりと湧き起つて來た。そして幼い時から馴れ睦んだこの變り者の杉浦と嘗ては自分を眼のやうに熱愛してくれた良人の時之助とを思ひ較べると、自分の今の境遇が呪はしい程情なくなつて來て、涙は自然と頰に流れて來た。

隣の座敷では母親の寝返りを打つ音がごそりと聞えた。此方から流れてゆく燈はその安らかな寝顔を朧げに浮き出させてゐる。俊子はそれを見ると突如母親の枕邊へ行つて思ふさま泣いてみたいやうな氣持ちになつた。そして躊躇ひながらふらふらと立ち上らうとすると、その時階下で賑やかな婢達の笑聲が聞えて、芝居見に行つたお初が歸つて來た。

良人の家



一

午前中にすつかり荷物を引纏めて大洗を發つ手筈にして置いたのが何かと手違ひになつて、漸う水戸の停車場から汽車に乗つたのはもうその日の夕方だつた。東京迄は僅か五時間ほどの道程ながら、男まぜずの旅馴ぬ女連なので、荷物の始末や何やらで唯そわそわと徒らに氣を焦る許りで、俊子も母親も心がうはづつたやうになつてゐた。愈〻汽車が動き出してから後も妙に落着いてゐられないで、東京へ着いてからあとの手筈などはおちおち相談し合つてゐる暇がなかつた。

霞ヶ浦の沿岸に來かゝつた頃はもう日もとつぷり暮れて、うすら寒い夜風が車窓から斷絶なしに吹き込んで來た。俊子は母親と膝を突き合はせて坐つてゐながら、お互に口をきくさへ慵いやうな氣がしてゐた。堪へ難い疲勞がいつの間にか胸の底まで壓しかゝつてきて、腕木の上へ力なく片肱を落したまゝ光のない瞳をぼんやり四邊へさまよはせながら頼りなささうな顔つきをしてゐ

た。今朝がたまでは久し振りて東京へ歸る嬉しさがともすると胸を騒がせてゐたが、もうそれさへ彼女には何でもない事のやうに思はれるのであつた。

荒川の鐵橋を渡つたかと思ふと、列車は間もなく消魂しい汽笛を吹き鳴らしながら上野の停車場へ入つて行つた。蒼ざめたアーク燈の光や、都會の夜を飾るさまざまな光の餘影がぼつうと空を染てゐるのを見ると、俊子はそれでも俄に甦つたやうな氣持になつて顔色まで晴れ晴れしく勇みたちながら、

「初や、忘れものゝないやうにしつかり氣をつけてお呉れよ。」などと云つて氣忙しさうに起ちあがつた。そして列車がまだ停りきらない中に車窓を開けて、明るいプラットフォームを見渡してゐたが、遠くの改札口のところに弟の喜三郎がしよんぼり立つてゐるのを見附けると、浮々した聲で、

「お母様、喜三郎が迎ひに來てゐますよ。さつき打つた電報がもう着いたんですわね。」

母親もそれを聞くと安心したやうに合點いて車窓から顔を出しながら、

「おや、松田も來てゐるぢやないか。ほんとに呆然が揃つてゐるよ、私達が此處

にゐるのが分らないんだね。うろうろ捜し廻つてゐるぢやないか。」と云つて、肩を乘り出して先方へ手招きをした。

學生服を着た小柄の喜三郎と、くりくり肥つた書生の松田とはやがて母親や俊子の姿を見つけて、笑ひながら驅け寄つて來た。

「やあ、お歸んなさい。僕はこの前の急行だらうと思つて、もうさつきから一時間も待つてゐたんですよ。」喜三郎は嬉しさうに顏を赧らめながら云つた。

「まあ、さうかい、そりやお氣の毒さま。」と、母親もいそいそしながら、こまごました荷物を窓から松田へ手渡して、「實はこの前の汽車に乘る筈だつたんだけど、何しろ荷物は多いしごたごたしてしまつたもんだから。……兎に角、車の仕度は出來てゐるだらうね。」

「え、、もう一時間も前からちやんと彼處に待つて居ります。」松田は次から次と運び出される信玄袋や籐籠をプラットフォームの石敷の上へ積みながら云つた。

やがて母親と俊子は松田とお初に荷物の處理を命じて喜三郎に導かれながら改札口の方へ歩て行つた。俊子は二箇月振で弟に逢ふ嬉しさを頰に輝かしながら、

「ほんとに暫らくだつたわねえ。毎日學校へ行つてるの？」

「え、。この頃は實習があるもんだから忙しくつて仕樣がないんです。姉さんは思つたより肥つて來ませんねえ。」

「さう。自分ぢやそんなにも思はないのよ。なにしろこの二三日大變に元氣がいゝんですもの。」俊子は兩方の手で頰を抑へながら云つた。

「さう云へば顏色はよくなつてるけど。」と、喜三郎は氣休めのやうなことを云つて、「併し大洗はいゝでせう。僕は彼處の砂丘が實に好きなんだ。」

「だけど二箇月もゐちや倦きちまうわ。何を云つても東京に越した處はないわねえ。」

改札口を出ると、乘りつけの宿の車夫が四人ばかりひとかたまりになつて迎へに來てゐた。母親はその挨拶を鷹揚に受けながら俊子の方を向いて、

「兎に角、一度宅へお寄りな。御膳でも一緒に喰べて、それから津崎へ歸つたつ

て遲くはないんだから。」

やがて四臺の車は一列につながつて停車場を出た。そして明るい街路の賑はひのなかを麹町の松倉家の方へ向つて駛つて行つた。

二

松倉家の奥座敷で母子三人が久し振りに膳を並べて晩餐をはじめたのはそれから二時間ばかりの後だつた。

その頃はもう大洗の話も東京の話もひとわたり濟んで、皆の顔には心がのびのびしたやうな和やかな血の氣が浮いてゐた。俊子が十一二の頃から引續いて勤めてゐる婆やのお藤は拔襟をやるいつもの癖をだして、給仕をしながら一人で座持ちをしてゐたが、年の加減で此頃はひどく愚痴つぽくなつてゐるので、しまひには俊子の可愛盛りの話しなどを持ちだしてはつい涙含んだりした。

俊子はそんな話しを聞いてゐるうちにまだ實家にゐた時分のことをそれとなく思ひ出して、漸次と寂しい氣持ちになつていつた。あのときは彼樣だつた、

斯樣だつたと過ぎ去つた月日の出來事を思ひだすにつけても、まだ世の中のことは何にも知らなかつた處女の時代が懷かしくなつて、間うちを取圍む紙襖にも、屏風にも、床飾にもその時分の匂やかな記憶がまざまざと浮き上つてゐるやうに思はれた。殊に大床の正面にかゝつた亡き父親の肖像はそのなかでも最も慘ましい思ひ出を湧かせるものゝ一つであつた。いつみても變らぬ古ぼけた油繪の顔料は、悲壯な父の生涯を思ひ起させる前に先づ彼女の感じ易い胸の底に冷たい一脈の戰慄を湧かせるのであつた。

晩餐が濟むと、母親は俊子を連れて、人氣のない二階座敷へ上つて行つた。そこは彼女がまだ嫁に行かない前に居間として六七年の間も住み馴れた室で、肱懸窓の際には使ひ古した桐の小机さへその儘に置いてあつた。母親は力ぬけのしたやうな顔つきをしてゐる俊子を明るい電燈の火影に坐らせて、しんみりした聲で話しかけた。

「昨夜も聞いたことだけど、一體お前は今夜津崎へ歸つて何ういふ風にする心算なんだい？」

「何うつて別に仕様もないぢやありませんか。時之助に逢つて、よく話を聞いてみた上てなければ私には考へがつかないんですもの。」と、俊子は當惑したやうに云つた。

「そんなあやふやな事ぢや困るぢやないか。お前はそんなに差迫つた事ぢやないと思つてるかも知れないけど、次第に依つてはこれで隨分大事になるんだからねえ。そこはよく考へをきめてゐて呉れなくつちや私も困るんだよ。」

「そりや分つてますわ。でも幾ら時之助だつて私がかうして歸つて來てみればまさか夫婦別れをするなんて無茶な事も云やあしないだらうと思ひますわ。」

「何うだかねえ。兎に角あゝして自分で出懸けて來て、その話を持出したくらゐなんだからねえ。」と、母親は昨夜に引替へ心配らしい顔になつて、「もし眞箇に別れることにでもなるやうだと、世間へ對しても恥かしいし、第一お父様に申譯が立ちやしないもの。」

「さうですとも。私としたつてこれ程不名譽なことはありませんわ。譬へ此方にはちつとも惡い處はなくつたつて、世間では何と云ふか知れませんから

ねえ。」

「そりやどうせ私達の方が退けめになるに極つてゐるさ。離緣なんかになつて恥かしい思ひをするよりも、大抵なことは我慢して家のなかを穩かにしていくのが世の中の法なんだからねえ。そこが女に生れた不運と諦めるより外には仕様がないだもの。」

「全くですわ。ですから私も大抵なことなら我慢するつもりで居りますの。そのうちには又何うにかなるでせうから……。」

俊子は母親の沈んだ顏色をみるとしみじみ氣の毒になつて、力をつけるやうな言葉を次々と云ひ續けた。併し心のなかでは自分を捨てようとしてゐる薄情な良人の傍へ歸つてゆくのがひどく厭だつた。この儘たつた一晩でもいゝから懷かしい生みの家で母親や弟達と心置きなく語りあかしてゐたかつた。

愈時間に迫られて良人の家へ歸らうとする時、母親は玄關の式臺まで送り出して來て、

「實は私が一緒に行つてやるといゝんだけど、今夜はまあお前ひとりてお歸り。

さうしてなるべく時之助さんに逆らはないやうにしてね。私の方ぢや伯父さんや遠藤さんともよく御相談して決してお前の不爲めになるやうにやしないから。」と、小聲でひそひそ耳打ちした。

俊子は默つて合點いて、その儘殘り惜しさうに車に乘つた。

三

ごとりと梶棒を卸す音に驚かされて我に返ると、車はいつの間にか阪の多い屋敷街を通り過ぎて山王下にある良人の家の門口へ來て曳き据ゑられてゐた。俊子は今まで想像の綾絲を織交ぜながら頻りに思ひ續けてゐたさまざまの考へを一時に破られて、何とも云へぬ不安の念に襲はれながらそつと車を降りた。

半開きになつた玄關の西洋扉の處には停車場から眞直に歸つた松田と下婢のお菊が出迎へに出てゐた。そして奥へ通ふ廊下口には大洗から持つて歸つた柳行李や、小形のトランクが荷札を貼つたまゝ行儀よく置き並べてあつた。

俊子は口健めに饒舌かけるお菊に程のいゝ挨拶をしながらコート脱いだり

身繕ひを直したりした。そして破れるやうに躍る胸を抑へながら、思ひ切つて、

「旦那様は？」と、訊いてみた。

と、隅の方で鞄の合鍵をなほしてゐた松田はふと思ついたやうに顔をあげて、

「まだお歸りにならんです。實はさつき松倉さんからお報せがあつた時に電話でお歸りの時刻を伺ひましたんですが、今夜は會議があるから遲くなると仰有つておいでゝした。」

「まあ、さう。」と、俊子は何氣ない返事をしたが、心の底では壓しかゝつてゐた重石が突然摺り落ちたやうにほつとした。良人に逢ふ苦痛が一刻でも先へ延びたのが何よりも嬉しかつた。で、彼女はその儘奥の茶の間へ通つてそわそわしながらお菊を相手に着換へをはじめた。

着換へが濟むと俊子はやつと火鉢の前へ落着いて坐つた。風呂が湧いてゐるといふのでひと流しざつと旅の疲れを洗ひ流して來たかつたが、何しろ今にも知れぬ良人の歸りが氣遣はれるので、その儘お菊が汲んで出す茶を啜りながら留守中の出來事など何にくれとなく聞いてゐた。

口の多いお菊は自分の料理して出す食物が良人の氣に入らなかつたことや、歸りの遲いことや、毎夜のやうに酔つて歸つて來ることなどを蔭口でもきくやうな調子で訴へた。まだ年端もいかない小婢の口からそんな話を聞くのが俊子には此上もなく厭に思はれて、終には惡猾すさうに動くその瞳が自分まで馬鹿にしてかゝつてゐるやうにみえて來た。何か胸に應へる樣な事を云つてたしなめてやらうとは思つても、その言葉が生憎彼女の心に浮んで來なかつた。

そのうちに彼女の心には良人の家に於ける自分の位置がもう一度はつきり映つて來た。と、かうしてうかうか他事に氣を取られてゐるのが餘りに呑氣らしく思はれて來て、良人が歸る前に十分前後を考へて自分の態度だけはしつかり極めて置かなければならないといふことが俄に痛いほど胸を責めて來た。よく考へてみると、眞實の自分はまだ良人に賴り良人を中心にしてすべての事を運ばせやよとしてゐるばかりで、その他には何一つ取留めた考へが定まつてゐる譯ではなかつた。若し良人が此處で眞實冷たい心をその儘出して見せたならば、その瞬間に自分はもうへろへろになつて落ちてゆく處へ落ちて行かな

ければならないのであつた。

俊子は慴えたやうにはつとして起ち上つた。そして何を思ふ餘裕もなく茶の間を出て、良人の書齋になつてゐる西洋間の十疊へ入つて行つた。

四

ぱつと電燈を點すと、俊子眼の前には黯んだ色の毛氈で張りつめた安樂椅子や、大きな卓や、書棚や、額などが一時に異樣な薄蒼い光を浴びながら現はれて來た。きちんと片附いてはゐながら何處となく人氣の薄い室内には彼方でも此方でも家具につけた金具が冷たくちらちらと光つて、塵臭いやうな絨緞の匂ひと、煙草の匂ひがそこはかとなく漂つてゐる。

俊子は譯もなくいらいらしながら安樂椅子のうへゝ腰をかけてみたり、良人の仕事卓のうへゝ倚かゝつてみたりした。それでも益々胸がわくわくするばかりでどうしても沈着いてものを考へるやうな氣持ちにはなれないので、到頭しまひには帶の間へ手を挿んだまゝ其處邊を矢鱈に歩き廻つた。

室内にあるものは何一つ變つてはゐなかつた。彼女が留守にしてゐた此二箇月の間に新しく取入れられたものもなければまた捨去られたものもなかつた。花瓶や灰皿の置き所まですべて舊の儘で、丁度彼女が東京を發つ前の日、お菊を相手にすつかり室内の整理をした以來殆んど誰もこの室へは入つたものがないかのやうにきちんとしてゐる。それが彼女には云ひ知れず寂しかつた。

やがて彼女はまた良人の仕事卓の前へ來て、今度は厚いクッションの懸つた腕椅子のなかへくづをれるやうに腰を卸ろした。そして卓の隅の方に別に据ゑつけてある洋燈形の電燈へ火を點して、何をしようといふ考へもなく卓の上を見まはした。手紙を盛つた料紙籠や、積み重ねた種々な書類の間に、彼女はふと革表紙に包まれた小形の家計簿を見付け出した。一家の出納は殆んど良人がひとりでやる例になつてゐるので、彼女は今迄にこの家計簿すら篤と目を通したことはなかつた。で、彼女は物珍らしいやうな氣になりながらそれを取上げて頁から頁を繰つてみた。

中には各月に亙つて一圓二圓の小金まで一々明細に記けてあつた。使途の

書いてある金は彼女にも合點がいつたが、よく氣を留めて調てみると、彼女はこまこました支出の間に自分の知らない不思議な金があるのを發見した。而もその額はいづれも百圓二百圓といふので、多い時には四百圓を越してゐることもあり。そして使途はいづも譯の分れらぬ外國語や符牒のやうなもので書いてあるので、彼女にはさつぱり當てがつかなかつた。

そのうちに彼女はそれ等の金が皆良人の遊蕩の代になつてゐるのではあるまいかと云ふことに初めて氣が付いた。有り餘る程でもない資産の中からかうして無謀に引出された金が今何んなに一家の經濟を危くしてゐることだらうと思ふと彼女は漸次と息づまるやうな不安に落ちていつた。そして自分の妻の療養の費用さへ惜しんでゐながら、その癖卑しい私慾のためにはこれだけの勘からぬ金を擲つてゐる良人の心根が無上に淺猿しく思はれて、その一事でももう彼と自分との間に横たはつてゐる將來が明白に說明されてゐるやうに思はれた。そして限りのある資産のなかからは到底これだけの金が出て來る筈のないことまで考へ及ぶと、良人が金を扱ふ職業を持つてゐるだけに、彼女は

あらぬ疑惑に肚胸を衝かれるのであつた。

彼女は腕椅子に倚つたまゝ漸次と暗い思ひに沈んでいつた。その間にどれだけの時が經つたか、彼女自身ではまるで覺えなかつた。少しの光明もない自分の將來のことや、良人のことなどが暗い不安の影に彩られながら映つたり、消えたりした。そして薄情な良人の家から世間の嘲笑のなかへ出てゆかなければならぬ自分のみじめな後影を我れと我が心に描き出してみると、彼女は急に胸が迫つて來て、涙は自然と頰に流れて來た。

暖爐（ファイアプレエス）のうへの置時計が小禽のやうな頓狂な聲で十二時を報ずると間もなく、何處か遠くの方から自動車の警笛が屋敷町の靜けさを破つて斷れ斷れに聞えて來た。

五

自動車は刻一刻に近づいて來て、まさかと思つてゐる間にエンジンの音を高く響かせながら家の前へきてぴたりと停つた。

俊子は悸乎として突如卓の上の電燈を消した。そして我にもなく窓際へそつと體を摺寄せて、硝子越しに戸外の樣子を覗つた。

丁度書齋のすぐ前は庭木戸になつてゐて、その垣續きに表門が建つてゐるので、俊子の眼には戸外の樣子が庭樹の闇を透してはつきりと映つた。表門の前には幌を深く下ろした一臺の自動車が停つてゐる。電光のやうな明るい前燈（ヘッドライト）を向ふ側の邸の土塀へ射つけてゐるので、その反射で車中の人影は却て見えなかつたがやがて黑い服を着た運轉手が飛び降りて來て、恭々しく戸を開くと、中からは良人が外套の前を披けたまゝだらしのない恰好をして蹌々しながら降りて來た。そして車中にはまだ他にも連れが乘つてゐると見えて良人は其處に立つて何事かごとごと話し合つてゐたが、やがて聲高に笑ひ崩れてまたつッと車の方へ寄つて行つた。その時、開いた窓からは眞白な纖細い手がすラッと出た。良人は車の泥除けの處へ倚りかゝつて、その手をしつかり握りしめながら暫らくの間立竦んでゐたが、それが濟むと運轉手はまた良人に惡叮嚀な辭儀をして、車の戸をぱたりと閉ぢてしまつた、

自動車が再び動き出さうとする時、車のなかゝらは、
「ぢやきつとよ。左様なら。」と、云ふ聲がかすかに聞えた。その聲は確に若々しい女の聲だつた。そして自動車はその儘家の前を通りぬけて、何處へともなく駛り去つてしまつた。
俊子は自失したやうに身動きもせずに窓の下枠へつかまつたまゝその光景を凝視してゐた。良人のだらしのない姿を見ても、車中から聞えた女の聲を耳にしても、彼女の胸にはもう何の感情も湧かなかつた。それがために感情を動搖させるにしては彼女の胸が餘りに興奮し過てゐた。
やがて良人は方々の戸を手荒く開け閉てしながら漸次と書齋の方へ近寄つて來た。書齋の戸の把手ががちやりと音を立てた時、俊子は初めて我に返つて、頭から冷水でも浴びせかけられたやうにひやりッとした。そして突如窓際を離れて、隅の方の椅子の椅背につかまりながら良人を迎へた。
良人は可成り醉つてゐるらしく、大柄な背廣服を着た身體が中心を失つたやうにふらふらしてゐた。短い髯を生やした圓々した顏は額から頰へかけて眞

紅に熟れて、分厚な金緣眼鏡の底からはとろとんした眼が何處を見るといふのでもなくちろちろしてゐた。
良人は俊子の姿をみると吃驚したやうに立止つた。そして頭から足の爪先まで一渡りじろつと見下ろしたあとで、突如顏を背けて仕事卓の方へふらふら歩いて來た。俊子の方へは一言も口をきかずにその儘腕椅子のなかへどつかと腰を卸ろして、洋服の隱囊から時計やら紙入れやらいろんな物を取出して、卓の上へばらばら投げ出した。
俊子は口をきく機會を失つて石像のやうに口を噤んだなりて突立てゐた。一言でも言葉を發したら直樣一喝のもとに云ひ伏せられて仕舞さうな氣色なので、彼女は體を慄はせながら穴へでも入り度いやうな思ひで態と默つてゐた。
良人は身についたものをすつかり取つてしまうと、今度は何と思つたか、上着を脫いで白襯衣ひとつになつた。そして兩手で頰を抑へながら卓のうへゝ肱を突いてゐたが、やがて駄々ッ子のやうな怒氣を含んだ聲で、
「おい、歸つたら歸つたで挨拶ぐらゐしたら可いぢやないか。」と、怒鳴つた。

「何うも相濟みません。いろいろ御迷惑を懸けまして……。」俊子は自分でも何を云つてゐるのか分らないやうな調子でやつと此れだけ云つた。その先言葉を繼がうとしても、妙に他人がましい改まつた言葉ばかりが舌の先へ込みあげて來て、思ふやうな事はひとつも云へさうにないので、その儘低く首を垂れて、押默つてしまつた。

六

そこへお菊がいつものやうに紅茶を入れて持つて來た。花模様のある綺麗な茶碗と白磁の砂糖壺とを銀盤の上へ一緒に載せたまゝ卓の隅へ置いて、小悧しげな眼つきで夫婦の變な様子をぢろぢろ偸み視ながら出て行つてしまうと、室内にはまた異様な靜けさが歸つて來た。

良人は紅茶の方へは眼もくれず、やがて仕事卓の抽斗から葉卷を取り出して自棄にマッチを摺つて火を點けた。そして旨くもなさゝうに矢鱈と煙を吐てゐたが、漸う思ひ切つたといふやうに俊子には背を見せたまゝ口を切つた。

「一體お前は何のために歸つて來たんだ。」九州訛のあるその言葉の調子はまるで詰問でもしてゐるやうに强く響いた。

俊子は、毎度の手紙で歸れと云はんばかりな事を書いて寄越しながら、何の爲めとは妙なことを聞くものだとは思つたが、それでも卑下した直ほな調子で、

「もう餘り長くもなりますし、それに昨日母が迎へに來て呉れましたものですから……。」

「なに、母さんが迎へに行つた？」良人は驚いたやうに顔をあげて云つた。

「は、昨晩一晩彼方へ泊りまして、今日一緒に此方へ歸つて參りました。母も餘り長くなるから一應東京へ引上げたら何うかつて申しますもんですから……。」

良人はそれを聞くと返事もせずに默つてゐたが、やがて聲の調子を變へて威嚴を示すやうな様子をしながら、

「さうか。それぢやお前は母さんから何も彼も聞いたゞらうな。」

「は……。」俊子は仕方なしに消え入るやうな聲で答へた。

「さういふ前觸れがあつたのなら俺も話しいゝが、……實はあの事に就いては

俺もいろいろ考へて見たんだが、何うも此際斷然たる處置を執つてしまう方が雙方の爲にいゝやうに考へられるのだ、かう云へば如何にも俺の方が薄情のやうに聞えるが、併し俺は今迄に良人としての義務は十分盡しとるんだからな。」良人はいつもの癖で、義務とか責任とかいふ壓付けがましい口吻を用ひた。

俊子は到頭最後の場面に到達したとは思ひながら、茲が大事な瀬戸際だと思つて渾身の力を唇に集めながら、

「昨夜母からそのお話を聞かされましたんですが、私には何ういふ譯でさうなるんだか分らないんで御座います。そりや……。」と、云ひかけようとすると、良人はその言葉を荒々しく引き取つて、

「その譯はよく分つとるぢやないか。お前が彼地へ行く前にも云つて聞かせた通り、第一お前の健康が人の妻たる資格を失つとるんだ。そんな脾弱い體で何うして此れから先俺と一緒になつて行ける。そりやお前の實家のやうな金滿家なら金にあかして療治も出來やう。また片輪同樣な妻君を床の間に据ゑて置いても暮らして行けやうさ。併し俺のやうな細い身代ぢや到底そんな呑

氣な眞似は出來んのだ。お前はうかうかしとるから知らんだらうが、お前の今度の病氣で俺は千圓からの金を費つてしまつたんだからなあ。」

「でも……。」俊子はさつきの家計簿のことやら、自動車のことやらを一度に思ひ浮べながらせめて恨みだけでも云はうとしたが、もう言葉が舌に粘着いて口をきくことさへ出來なかつた。

七

良人は嵩に掛つた樣な調子になつて、

「それに俺はずつと以前から考へとつたんだが、お前は歴とした松倉家のお嬢さんだ。俺はどうかと云ふと、今てこそ社會で相當な位置も得てゐるが、舊を糺せば九州の片田舍の土百姓だ。此の前故郷へ連れて行つたときお前は俺の親爺や、母に逢つて何んな容子をした。あの時のことは忘れやしまい。そりや東京育ちのお嬢さんの眼に田舍といふものが何んな風に映るか位ゐは俺だつて知らんことはない。お前は確に俺を馬鹿にした。其からといふ者はお前にし

ろ母さんにしろ俺の前で公然俺を輕んずる樣な氣振を見せたぢやないか。」
「まあ、隨分な事を仰有るぢや御座いませんか。そんな、そんな事をした覺えは一度だつて御座いませんわ。」俊子はひどく興奮して吶りながら云つた。
「今になつてそんな辯解をしたつて通るもんか。俺はちやんと見てゐるんだ。」と、良人は嘲るやうに笑つて、「併しそれはほんの一例で、そんな事を數へだてした日にや限りがありやしない。今になつて考へてみりや全く俺が方針を過つてゐたんだ、俺にはお前のお上品な趣味も分らんし、第一お前が何を考へてゐるのかそれさへ分らんのだ。どうせ長い間には必ず衝突が來るのはもう結婚した當座から分つてゐたんだ。此れから先はまた今よりも一層厭な衝突が來るにきまつてゐる。だからそんな不愉快な思ひをしてまで同棲してゐる必要はないのだ。それに身體でもしつかりしてゐりや兎も角、今の樣なそんな病身でこれから先そのために俺の金を費はれちや共倒れになつちまふ許りだからな。」
俊子はそこ迄聞くと頭がかッとして、良人の言葉が耳に入らないほど神經が昂ぶつてきた。假りにも夫婦といふ名のついた間柄でゐながら、自分は遊蕩三

味に日を送つてゐて、妻が病氣といふ避け難い羽目に陷つたのに難癖をつけるなどとは餘り勝手な仕方だ、其ほどまでに自分は安つぽい犧牲なのだらうかと思ふと、さすがの彼女も憤怒を感じない譯にはいかなかつた。そして彼女の眼には一年前の良人と、今針のやうな冷たい言葉を云ひ續けてゐる良人とがまるで別人になつて映つてきた。時も時、處も丁度この書齋で、その頃はふたりとも夜毎に蜜のやうな甘い抱擁に醉つてゐた。その頃の記憶を思ひ返すと、人心といふものは斯うまで早く變り果るものかとつくづく情なくなつて、彼女はいくら抑へようとしても込みあげて來る涙が次々と容赦もなく頰に流れ落ちた。
暫らくして俊子は眦目とは思ひながらもう一度自分の身を良人の頑な心の前に投げ伏して見る氣になつて、
「でも、折角今迄かうして參りましたんですから、出來るものなら此儘にして置て頂き度んて御座いますが、……それに世間といふものも御座いますし……。」
「そんな情實に拘泥はつてゐられるもんか。この世智辛い社會で生活して行かうといふのに、周圍の事情なんぞ氣にしてゐて何うなるもんか。人は何と云

はうが、俺は俺で考へがあるんだ。」と、良人は突き離すやうに氣負つて云つた。

それを聞くと俊子は急に狂氣したやうになつて、手足を慄はせながら、

「そんな事を仰有つたつて駄目で御座います。そりや貴方の口實なんです。貴方は私に飽ておしまひなすつたんです。きつとさうです。」と、泣き聲を振絞つて叫んだ。

「靜かにしろ。飽きやうが飽きまいが俺の勝手だ。」と、良人は嘲けるやうに云つて、「俺はかうと思つた事は必ず斷行する。ちやんとした理由さへあれば俺は何んなことをしても不道徳とは思はん。……兎に角俺は明日から店の用で一週間ばかり大阪へ行つて來なければならんから、歸るまで此の問題はこのまゝ懸案にして置く。お前もその間に母さんともよく相談して前後の考へを定めて置くがいゝ。」と、云ひ捨て、良人はふらふらと立ち上つた。そして葉卷の吸さしを暖爐へ投げ込んで寢室へ通ふ扉をあけて、そのなかへ姿を隱してしまつた。

俊子は拘攣つたやうに肩を竦めてその後姿を見送つてゐたが、到頭我慢しきれなくなつて、安樂椅子の上へ顏を埋めながら聲をたてゝ啜り泣きしはじめた。

一

良人の時之助が大阪へ發つた翌日のことであつた。朝から母親は俊子を訪ねて、その日一日母子額を集めていろいろと善後の手段を相談しあつたが、お互ひに愚痴つぽい喞ち言を云合ふばかりで、此れと云つて取留めた考へが決まる譯でもなかつた。そして夕陽が西へ陰つてくる頃になると、母親も到頭思ひ切つて、涙含んだやうな頼りない顔つきをしながら家から迎へに寄越した車に乘つて歸つて行つた。

それと殆んど引違へに、思ひもかけぬ杉浦の夏子がひよつくり俊子を訪ねて來た。初々しい丸髷に結つて、お召か何かの派手な衣裳を着飾つたその姿が玄關先に立つてゐるのをみると、まだ涙の乾ききらぬやうな俊子の顔にも俄に抑へきれぬ歡びが燃えて、彼女はいそいそしながら自分から先に立つて客間へ案内した。

夏子はくりくり肥つた頰に持まへの快活な微笑を浮べながら、

「どうもすつかり御無沙汰をしてしまつて。」と、云ひいひ室内へ入つて來たが、坐が定まると懷しさうに俊子の顔をみながら、

「ほんとに暫くだつたわねえ。いつからか一度手紙で御様子を伺はうと思つてゐたんですけど、家の方が忙しいもんですからつい不精をしてしまつて。ほほゝゝ。實は昨日喜三郎さんにちよつとお眼にかゝつて、貴方が此地へお歸りになつたことを伺つたのよ。あなたも隨分だわ、歸つたら歸つたつて一寸電話でゝも報らして下さればいゝのに。」

「どうも濟みません。私も餘り御無沙汰してゐるから、ちよつとお報らせ旁伺はうと思つてたんですけど。」と、俊子も夏子の晴れやかな調子に引入れられて浮々しながら云つた。

「御無沙汰はお互ひさまだわ。それよりもあなた、お體の方は何うなの？」

「有難う。まだどうもはつきりしないので困つてゐますの。」

「さう云へばお顔色もよくないわねえ。あんなに長く海岸へ行てらしつて、何うして利かないんでせうねえ。」夏子は眉根に子供のやうな愛くるしい小皺を

寄せながら心配さうに云つた。

「どういふんですか、いつまでもこんなぢやほんとに困つてしまひますわ。」俊子も寂しく笑ひながら答へた。

そこへお菊が茶道具を運んで來た。

二人は苦い茶を啜りながら親身な友達らしい打解けた調子で別れてゐた間の話を各々に語り出した。一家のことや、友達の噂などが次から次と續いた。

暫らくすると夏子は急に氣忙はしさうな樣子に歸つて、

「ねえ、俊子さん。今日は是非貴女を連れ出さうと思つて伺つたんですが、此れから一緒に帝劇へ被往やらなくつて？」

「まあ、隨分藪から棒なのねえ。一體何ういふ譯なの？」俊子は餘まり突然なので夏子の顏色をみながら訝しむやうに訊いた。

「いえ、別に譯はないんですけど、今日はね、兄の催して家ぢう皆して行くんですの。西洋人の俳優が眞ものゝオペラを演るとかで、そりや實に綺麗なんですつて。」と眞顏で云つたがみるみる笑ひ崩れて、「ほゝゝゝ。ほんとの事を白狀しま

せうか。實はねえ、笑つちや可けなくつてよ。今夜は兄がお見合をするのよ。」

「まあ、さうなんですか。」と、俊子も微笑みながら云つたが、その時彼女はいつぞや母の口から聞いた杉浦の結婚の噂を思ひ出して、名狀し難い或る感情に胸を衝かれた。

「こんな時にあなたをお誘ひするのは失禮かも知れないけど、母や兄も是非久し振りでお眼に懸り度いつて云ふもんですから。」と、夏子は無論俊子も兄の慶事を喜んで吳れるものと信じきつてゐるやうな調子で云つた。

俊子は何う考へても劇場へ行くやうな呑氣な氣持ちにはなれないので、良人が留守のことなどを持ちだしていろいろに斷つた。と、何にも知らない夏子は留守ならば却て都合がいゝといふやうな無邪氣なことを云ひ出して、强つて誘ひ出さうとした。しまひには機嫌を損じたやうな容子で、恨みがましいことまで訴へだした。

そのうちに俊子はふと氣が變つた。せめて晴れやかな心を持つた此の人達と一緒に芝居でもみてゐたならば、今の心の苦悶も少しは紛れて、考へも決める

ことが出來るだらうと思ふと、急に行つてみる氣になつた。そして久し振りて懷かしい毅に逢へることが彼女を最も強く劇場の方へ惹きつけて行つたのてあつた。

俊子はそわそわしながら身仕度をしに奥の間へ入つて行つた。

二

思はぬことて手間どつたのて、俊子と夏子が帝國劇場の南側の玄關へ着いた頃にはもうその夜の喜歌劇の第一幕は既に開いてゐた。明るい光に照らされた石階を登つて、案内の小娘に導かれながら、彼等はその儘すぐに特別席へ入つた。

席に着いてみると、明るみに馴れた俊子の眼には何處に誰がゐるのやらちよつと見分けがつき兼ねたが、ふと氣づくと直ぐ隣の椅子には年老つた夏子の母が坐つてゐるので、彼女は小聲て叮嚀に挨拶した。その挨拶が濟むと俊子はやつと落着いた氣になつて、初めて舞臺の方へ眼をやつた。

舞臺には殊更に誇張した強い色て塗られた西洋の田舍の光景らしい場面が現はされてゐた。正面から上手へかけては遠見の山や、こんもり繁つた樹立や、崩れかゝつた石階のやうなものが巧に現はされて、下手は窓の多い家の壁て仕切られてゐた。そしてその前の廣場には靄のやうな薄紅い光が一面に立ち罩めて、その光のなかには異樣な扮裝をした男や女が十人ばかりも打群れて、互に聲を爭ひながら美しい唄をうたつてゐる。固よりすべては外國の國語て唄はれるので、俊子には唄の意味も、曲の筋も殆んど解せられなかつたが、それでも咽ぶやうなヴイオリンの伴奏につれて湧き起る透明なソプラノの肉聲は彼女の胸を躍らせた。殊にその一座の花形らしい美しい女優が幾度か場内をどよます拍手の聲に答へて、軟やかな四肢を思ふさま波打たせながら、同じ曲節を繰返して見せる姿は最も彼女の視覺を魅した。

舞臺の上の天井には金色の裝飾が夢のやうにちらちら光つてゐる。管絃樂の樂座から匂ひ上つてゆく音樂の波はそこらでたゆたいながら圓天井の下て渦を卷いて、末は互に饗應しあつてゐるやうにみえる。四邊から匂つて來る溫

かな香水の薫りに浸りながらその様を眺てゐると、久しくかうした華やかな場所から離れてゐた俊子の胸には寧ろ強烈に過ぎる位な歡びが充ち溢れて來た。胸の底に鬱してゐた苦悶が少しづつ薄らいでゆくと同時に、果敢ない光明や、希望がさうした氛圍氣のなかから漠然と湧き起つて來るやうにさへ思はれた。

そのうちに俊子はふと自分の前の前の列に脊の高い一人の男の洋服姿を發見した。薄闇のなかなので、舞臺の方から流れて來る光を受けてその男の眞白なカラアだけがくつきりと見えてゐる。彼女は釘づけにでもされたやうにその男の細かく縮れた頭髪や、幅廣な肩の恰好を一心になつて瞻めてゐたが、やがてそれが今迄心に待ち設けてゐた毅であることがやつと感知された。と、同時に何處かに殘つてゐた物足りなさが一時に充たされたやうな氣がして、彼女の胸は嬉しさに喘いで來た。

俊子は毅の所在を知ると共に、今度は止み難い慾念に驅られて今宵の見合ひの相手になる子爵令嬢の姿を見付け出さうとした。毅と一つ置いて隣りに二人の若い令嬢が肩を並べて坐つてゐたが、孰れも流行の夜會卷きに結つた頭髪

を見せてゐるだけで、俊子の席からはその横顔さへ見えなかつた。て、彼女は何氣ない風をして彼方此方の座席に眼を配つてゐたが、其時、舞臺では突然高らかな合唱の聲が起つて、賑やかな樂座の管、絃樂と縺れながら暫らくの間場内に耳を聾するやうな轟響を送つたあとて、幕は拍手の音と一緒にすうと落ちて來た。そして目の覺めるやうな光がぱッと一齊に四邊を明るくした。

場内の觀客はどやどやと起上つた。

俊子はその時はじめて毅の顔を眞面に見た。彼は座席から立ちあがりさま心持ち顔を赧めながら彼女に挨拶した。その刹那、俊子自身も亦血の氣が頰に上つてゆくのを明かに感じた。

三

俊子が初めて毅と口をきゝあつたのは二幕目の幕間だつた。二十五分の食事時間にひと連れの人達は二階の食堂へ行つて一緒に晩餐をとつた。ひとつの食卓へ集つてみると連れは意外に多勢だつた。杉浦家からは母親と毅と夏

子とそれに夏子の良人の安達大尉も來てゐたのだが、勤め先の會社の招宴があるとか云ふので一幕目が終るとすぐ歸つて行つた。そして嫂の靜枝だけが殘つてゐた。清水子爵家からは當の相手の房子と、子爵の未亡人と、それに奥女中の老女がひとり隨いて來てゐた。そのうへ媒人役となるべき原田少將の夫妻が加はつてゐるので、十一人の大連がずらりと食卓に就いた時にはまるで綺羅びやかな招宴でも開かれたやうな有樣で、周圍に混雜した觀客達の中には怪訝さうに其群を偸み見る者もゐた。

俊子は夏子に强られて彼女と、彼女の母親との間に席をとつた。夏子の隣には黑の脊廣を着た毅が葉卷を手にしながら落着かない容子をして坐つてゐた。毅は一體が脊丈の高い方なので、俊子の處からは夏子の肩越しに彼の尖つた鼻や大きな眼や房々と波打つ漆黑の頭髪が見えてゐた。そして彼等の向側には清水家の未亡人と、靜枝と房子とが肩を並べて坐つてゐた。

食事の間には會話は各自の間に取交はされた。安達大尉はナイフをがちやつかせながら妙に改まつた口調で原田少將に話しかけてゐる。原田夫人は子

爵未亡人と何ごとかひそひそ話しあつてゐる。房子と靜枝とは學校友達なので遠慮勝ちに微笑みながらも親しげに話してゐる。そして口まめな夏子は俊子の方を向いたり毅の方を向いたり、また時々は卓越しに嫂の靜枝の話しを引取つたりしながらひとりで噪いでゐた。

俊子と毅とは初めのうちは夏子を間に置いて話してゐたが、夏子がふと、

「ねえ、兄樣。俊子さんに伺つたんですけど、大洗つていゝ處らしう御座んすわねえ。私も良人にさう云つて二三日遊びにやつて貰はうかと思つてますのよ。」

と、云つて大洗の話を持ち出したので、口の重い毅もそれを機にフォークを置いて、俊子の方をみながら、

「僕も高等學校にゐる時分に友人に誘はれて行つたことがあるが、ひどく寂しい處ぢやありませんか。」

俊子は微笑みながらその時初めて神經質な毅の顏を眞面にみて、

「えゝ。もうほんの田舍で御座んすわ。松林と砂丘ばつかして、一人で行つてゐるんでしたらとても十日と辛抱は出來ませんわねえ。」

「さうでせうとも。よくは覺えてゐないが何でも寂しい處だつた。」毅は眞面にみてゐられないやうに俊子から眼を移して、フォークの柄で卓の上へ字を書きだした。

「でも何か見る處はあるんでせう？そんなに浪の荒い處なら、海岸だけ散歩して歩いてゐたつて、鎌倉や大磯よりも増しだわねえ。」夏子はちよつと手をつけたばかりの皿を押しやりながら云つた。

「えゝ。八景なんて名のついてゐる景色のいゝ處はあるんですけど、私達の足ぢやちよつと散歩かたがた見て廻るつて云ふ譯にいかないのよ。ですから夕方になるとたつたひとりで砂丘の間をぶらぶら歩くの。夕燒のする日なんかには砂丘が眞紅に染まつてね、あの景色ばかしはほんとに何とも云へませんわ。私は寂しい處の方が好だもんですから、夕方になるときつと砂丘へ出ましたわ。」

「私もそんな處が好きなのよ。さぞいゝでせうねえ。」と、夏子は悧口さうな眼をことごとしく睜りながら云つた。

向ふ側の靜枝も房子もいつか話をやめて、此方をまじまじ偸みみてゐた。

四

食事が濟むと彼等は又ひとかたまりになつてぞろぞろ二階廊下へ出た。玻璃の瓔珞をさげた飾電燈から放射する華やかな燈火の輝きは繪模樣を置いた天井や、大理石の柱や、柱飾りの黄金の浮彫りなどに反映して、生溫い人蒸息の立罩めたなかには眼も綾な裝ひを凝らした觀客達が肩て押し合ひながら往來してゐる。殊にその晩の觀客は異國人が多かつたので、美しい飾帽を被つた女や、肩から腕へあらはな肉色を見せた女などが、棕梠竹の葉蔭や、石階の上などに打群ていやが上の衒燿やかさを添へてゐた。

年老つた人達は柱の陰へ集まつて煙草に火を點けながら偶然出遇つた知己の人などと一緒に何事か笑ひ興じはじめた。女連れは女づれで一團になつて、四邊にそよめく美しい人波を眺めながら愼ましやかに話し合つてゐたが、やがて夏子はすぐ傍にしよんぼり佇立つてゐる毅の方を向いて、

「ねえ、兄樣、房子樣に俊子さんを御紹介して可くつて？先刻から嫂樣にお願ひ

しようと思つてゐたんですけど、機がなかつたもんですから。」と、小聲で云つた。

毅は餘計なことをと云ふやうにちよつと眉根を寄せたが、その儘口もきかずに合點いた。と、夏子はいかにも交際馴れた容子で房子の傍へ俊子を連れて行つて叮嚀に紹介した。

二人は定りきつた初對面の挨拶を交はして互に態とらしい禮をしあつた。そして機が惡かつたせいか、次々と流れ出て來る筈の言葉もふつりと途斷れて、妙に顔を見合ひながらその儘右左に遠のいてしまつた。

俊子はその時房子のすらりとした姿を頭から足の爪先まで偸みみた。美しい令孃だとは思つたが、何處かに難があるやうに思はれて顏容なり着附けなりが今迄心に描いてゐたその人とはまるで違つてみえた。殊に態とらしく首を傾げて嬌態をしたり、眼を睜つたり、手足を振り動かしたりする容子が、彼女には蓮葉に見えて却て厭な氣がしさへもした。これが子爵家の令孃で、毅の夫人になる人かと思ふと、何だか嫉ましいといふよりも輕い嘲笑の念が湧き起つて來るのを覺えた。

そのうちに俊子はふと又氣が逸れて、漸次と引入れられるやうに氣持が滅入つてきた。かうして華やかな空氣に包まれてゐても自分の目前には最早避けることの出來ない運命が迫つてゐるのだ。端の人達の運命が明るければ明るい程自分の運命は暗くなつてゆくのだ。離緣！離緣！その慘ましい言葉を思ひ起すと、彼女は急に氣恥かしくなつて來て、我ながら體ぢうに冷汗が滲むやうな氣持ちになつた。そして何の苦勞もないやうな夏子や若い血の燃えたつてゐるやうな子爵令孃達と平氣で顏を見合はせてゐるのがひどく恐ろしくなつて、四邊に搖蕩する人聲や、物音や、光などがまるで神經の尖端に鋸を當ててもするやうに激しく迫つて來た。俊子は到頭我慢しきれなくなつて、手水にでも行くやうな風をしてそつとその群を離れた。そしてその足で眞直に二階の露臺の方へ歩いて行つた。

五

露臺には電燈の薄明りのなかに五六人の人影が動いてゐた。俊子は人眼に

たゝないやうに態と隅の方へ行つて、冷たい石の欄干へ片肱投げ懸けながら何うにかして心に壓しかゝつて來る惱ましい氣持ちを紛らかさうと焦つた。

俊子の立つた處からは南側の入口がすぐ眞下に見降ろされた。明るい光の流れ出た廣場には自動車や、馬車や、車が幾列となく眞黑に置き並べられて、その間には小さな人影が忙はしげに出たり入つたりしてゐる。往來を越して眞向ふは宏壯な警視廳の大建築で、露氣を含んだその屋根には雲の多い空から流れ落ちて來る薄月の光がほの白く澱んでゐる。遠く柳並樹の陰に縫ひ續いてゐる瓦斯燈の光も御濠の水に落ちて、公園に沿つた大街路には電車が駛り過ぎる度に蒼ざめた閃光が慌たゞしく空に明滅してゐる。

俊子は心を脅かすやうに迫つて來るさまざまな都會の轟響に取圍まれながら、開幕の呼鈴が鳴り渡つたのも知らずにしよんぼり立ち竦んでゐた。抑へようとすればするほど胸は益々滅入つて、暗い悲しい身の行末だけがまざまざと眼の前に立ち塞がつて來るばかりであつた。離緣となつたのちの寂しさや、世間に顏向けも出來ぬ面伏せな日陰者になり果てしまはねばならぬことなどが

先から先と環に環をかけてゆくやうに苦惱を廣げてゆくばかりであつた。そして夏子や靜枝や子爵令嬢などの陰翳のない境遇を思ふと、何う考へても自分ばかりが此の世の中で最も不幸な星を脊負つて生れてきたものゝやうに思はれて、何時とも知らず滲み出て來る涙とともに、今は唯ひとりの味方でもあり賴りでもある懷かしい母親の顏を思ひ浮べてゐた。

併し事實に於てはその母親さへ眞實賴りにすることの出來る人ではなかつた。口では强いことを云ひ、何んな健氣な振舞ひでもし兼ねまじく見えてゐても、事實は決してさうではなかつた。矢張り俊子と一緒に涙含みながら漸次と迫つてくる運命に戰いてゐる人だつた。俊子が進んで血路を開かない限り、母親自身では娘を勵まし奮起させて難關を切り拔けてゆくなどと云ふことは到底出來る話ではなかつた。譬へ氣性は何んなに强くても、それをするにはもう彼女の年齡が許さなかつた。境遇が許さなかつた。それ故、俊子は母親のことを思ふ度に懷かしさは胸に溢れながら、壞れかゝつた船に乘つてゐる憐れな伴侶のやうな氣がされてならないのであつた。

彼れ此れと思ひ煩つて居る間に彼女はふと石敷きの床を歩いて來る忍びやかな足音を耳にした。觀客の誰かゞ熱した頭を冷しにでもきたのだらうと思つて、格別に氣にも留めずにゐると、その足音は漸次と彼女の背後に近づいて思ひ懸けない聲が、

「俊子さんぢやない？」と、呼びかけた。

俊子は吃驚して振顧つた。そこには脊の高い毅が飾硝子をとほして流れてくる光に顔を背けながら突立つてゐた。

六

「まあ、貴方なの？」俊子はひどく慌てたものゝ云ひかたをして、貴方も場内へお入りにならないんですか？」

「え、こんな下らない演劇みたつて仕様がない。管絃樂なんかまるで成つてゐやしないぢやありませんか。」毅は投げ出すやうに云つて、貴女はさつきからずつと此處に出てゐたんですか？」

「え、少し頭痛がするもんですから……。」

「誰だつてこんな厭な音樂を聞いてゐりや頭痛がします。さうでない奴は餘程感じの鈍い奴か、音樂なんかまるで分らない人間でさあ。」

「まあ、隨分ひどい事を仰有るわねえ。でも私共には面白う御座んすわ。」俊子は少しづつ氣が浮き立つてくるやうな聲で云つた。

毅はそれを聞くと嘲るやうにちよつと鼻を鳴らして、騷々しい廣場の方をそれとなく見降ろしてゐたが、やがて遠慮深い調子に返つて、

「此處は寒いぢやありませんか。もし何んだつたら喫煙室の方へ行つてみませんか。何うせ演劇はみないんでせう？」

「え、見たつて仕様がないんですもの。」俊子は輕い返事をして、そのまゝ毅の後に引添つて喫煙室の方へ歩いて行つた。久しぶりで毅と話しの出來る嬉しさがいつの間にか俊子の胸からいままでの苦悶を拭ひ消してしまつたやうにみえた。

喫煙室には誰もゐなかつた。蒼みがかつたほの暗い電燈の光ばかりがうつ

すりと立澱んで、黒革の椅子や卓が彼方此方で冷たくてらてら光つてゐた。

毅は隅の方の安樂椅子へいつてまづ腰を下ろした。俊子は彼から少し離れた別の椅子へ座を占めた。そして急に親しげな口調になつて、

「隨分暫らくお眼にかゝりませんでしたわねえ。又彼方に居りました時分には度々お手紙を有難う。」

「いや、いつも下らない事ばかし書いてあげて。」毅は氣持にそぐはないやうな笑ひかたをしながら頰へ手を當てた。

「そんなこと御座いませんわ。ほかに誰方も手紙なんか下さる方はないし、私ほんとに嬉しう御座いましたの。」俊子は嫣然と笑ひながら云つて、ふと氣を變へたやうに、「でも貴方、何故房子樣のことをお報せ下さいませんでしたの。私母からお噂だけは伺つてゐましたけど、御當人の貴方が何とも仰有らないもんのですからついお慶びを申上げる機會がなくつて……。」

「房子のことつて何ですう。」毅は突然改まつた調子で口を入れた。

「あら、厭な毅さま。」俊子は呆れたやうに噴笑しながら、「そんなにお隱し遊ばさ

なくつて可いぢや御座いませんか。私今日夏子樣からすつかり伺つてしまひましたのよ。」

「あゝ又結婚の話ですか。」毅は吐き出すやうに云つて、何と思つたかその儘ついと傍を向いてしまつた。

七

俊子はその樣子をみると怪訝さうに眼を据ゑて毅の不機嫌らしい横顏をまじまじ瞻めてゐたが、何か云ひ出さないと話の繼穗がなくなりさうなので、また以前の語調に歸つて、

「房子樣は御身分もいゝし、それにあんなお綺麗な方ですから、ほんとに申分のない御緣ですわ。」と云つて、先々と言葉を追つて行かうとするのを毅は片手で遮つて、

「もうそんな話はやめて下さい。ありや皆虛言なんです。僕は結婚なんかする氣はまるでないんだ。」

「まあ虚言ですつて？」

「虚言ですとも、ありや母や夏子なんかゞ勝手に極て騒ぎたてゝゐるんです。僕がなんてあんな女と結婚なんかするもんですか。莫迦々々しい。」毅は神経的に眉を顰めながら總てを歷し付けるやうに肩を聳やかした。

俊子は疑はしさうに微笑んでゐたが、やがて、

「でも今夜は正式の御見合なんぢや御座いませんか。そんなにお隱しなさらなくつても可いぢやないの。」

「見合ひだつて？はゝゝ。」毅は苦しさうに笑つて、「貴女は何にも知らないからそんなことを信じるんだ。へ假りに僕が結婚するとしたつて、僕はあの女と見合ひなんかする必要はないんです。僕はもう半歲も前からあの房子をよく知つてゐるんですもの。」

「まあ、何うして？何うも私には貴方の仰有ることが信用出來ませんわ。」

「そりやさうでせうとも。此の事實を知つてゐるものは房子と僕とたつた二人きりなんですもの。」と、毅は心もち顏を赭めながら云ひ澁んだが、暫らくする

とやつと思ひ切つたらしく聲を落して、「こりや貴女だけの話だが實はあの房子は僕の戀人だつたんです。今年の夏鎌倉で初めて逢つたのが動機になつて、お互に隨分熱しあつたものです。併しそれも僅か三四箇月の間のことで、今ではもうあんな女のことは何とも思つてゐやしません。あの女にはずつと以前から僕の他に若い音樂家の戀人があつたんです。だから僕と戀に落ちたのも底を割つてみれば全く利害の打算から來てゐたので。さうと分つてみればいくら僕だつてあんな女をいつまでも思つてゐる譯にはいきません。僕の態度が漸次冷たくなつてくると、反對に今度は先方が激しく僕を追窮して來るやうになりました。それもその筈です。あんな貧乏華族の娘だから誰れか資產のある奴と結婚でもしなければ到底虛榮心を滿足させるやうな生活は出來ないんです。それが原因になつてあの女は到頭見ず知らずの他人のやうな顏をして今夜の喜劇を仕組んだんです。」

「でもそれにしても餘り仕組みがよく出來過ぎてゐるぢや御座いませんか。夏子さんのお話と貴方のお話を一緒に伺ふと何方が眞實なんだか迷つてしま

ひますわ。」俊子は眞顏になつて云つた。

「そりや分つてるぢやありまんか。僕の父は何しろあの通りの癈疾て、世間のことには殆んど口を入れる能力がないんですから、つまり母や夏子が淺墓な考へからうまく先方の奸計に乘せられてしまつたんです。殊に僕の母ときたら譯も分らない癖に貴族崇拜熱に浮かされてゐるんですからなあ。」

俊子はそれには返事をしなかつた。良人との紛紜がまた念頭に浮んで、別な考へが續々と湧き起つてくるので、彼女はその儘低く首を垂れて膝の上で無意味に指を弄んでゐた。

八

毅は絡まつたり解れたりする華奢な俊子の指先を偸み見ながらうつとり深い思ひに沈んでゐたが、暫らくすると何か發作のやうな考へが胸に閃めいたと見えて、彼は突如、

「結婚が何んだ。これほど莫迦げた虛僞が何處にある。」と、思ひ入つた調子で

獨語のやうにぶつぶつ呟いた。

それを聞と俊子はそつと頭を擡げて、毅の方をちらりと見た。その言葉の調子がその刹那彼女の胸に蟠つてゐる考へを激しく衝き動かして、或共鳴を彼女に與へたやうに思はれたのであつた。

「さうだ。全く結婚ほど詰まらないものはない。」と、かう思ふと、彼女は俄にずるずると引込まれるやうに感傷的な氣持ちになつて、暴逆な良人の仕打や、今の境遇を殘らず毅の前に打開けて、何かと自分の力に及ばぬ批判をして貰つたり、また自分に最も近しいこの男性の味方の口からしみじみ賴りになるやうな助言を聞き度いやうな氣になつた。併しいざ打開けるとなると何から先に云ひ出してよいやら妙に言葉が舌先に絡れるやうなので、彼女は氣を焦りながらも、もぢもぢしてゐると、その時、舞臺では生憎最後の幕が落ちたと見えて湧きたつやうな管絃樂の轟響と一緒に騷々しい拍手の音が一時に鳴り響いてきた。そして方々の戸口からは歸りを急ぐ觀客が潮のやうに流れ出てきた。

毅はそれを見ると急に立ち上つて、いつもの無愛想な聲で、

「ぢや今夜はこれて失敬します。近いうちに是非一度遊びに來て下さい。」と云ひ捨てゝその儘大股にすたすた喫煙室を出て行つた。

俊子は又とない好機會を逸してしまつたので、何とも云へぬ失望を覺えながら觀客の群の間に見え隱れしてゆく毅の後姿をぼんやり見送つてゐたが、やがて自分も立ち上つてそこに特等席の方へ降りて行つた。其處には一連の人達の姿ももう見えなかつたので、すぐに引返して南側の玄關の方へ廻らうとすると、華やかな光のなかに揉まれてゐる飾帽やレースの間に夏子の顏が見えて、

「俊子さん。此處よ。此處よ。」と、呼ぶ聲が聞えた。

子爵家の人達は一足先へ歸つたものと見えて、そこには杉浦家の人達ばかりがひとかたまりになつて殘つてゐた。夏子は浮いた聲で、

「まあ貴女何處へ行つてらしつたの。私達はどんなに搜したか知れないわ。」

と、俊子の肩を叩きながら云つて、「貴女、お迎へは來てゐるの？」

「いゝえ。何處かそこらで車を搜して歸らうと思つて。」俊子は氣耻かしさう

に答へた。

「そんなら何うせ空いてゐるんですから宅の自動車に乘つてつて下さいましな。今上の兄から銀座で待つてるつて電話が懸つて來ましたから、嫂さんは私達と一緒にそつちへ廻ることになつたのよ。」

「私共ばかりでは寂しう御座いますから。」夏子の母親も其後を引取て云つた。

「でもそれでは餘りて御座いますから。」と、俊子が逡巡するのを夏子は例の壓しつけるやうな調子で無理强ひにしひながら到頭階段の下に待つてゐる自動車の傍へ連れて行つた。

俊子は詮方なしに母親の後に續いて乘つた。と見ると、自分の坐るべき空席の隣にはいつ乘つたのか毅が外套に體を引包みながら小さくなつて坐つてゐた。

「では母様、左様なら。明晩伺ひますから。」といふ夏子の聲が窓際に聞えたかと思ふと自動車は輕い機械の音を立てゝぐつと斜に方向をかへた。そしてその儘鈍い喇叭を鳴らし續けながら、群衆の間を縫つて濠端の闇の方へ駛り出し

た。

毅は途々一言も口をきかなかつた。俊子も膝の上に兩手を重ねて、態と毅の身體に觸れないやうに肩を竦めてゐたが、華やかな劇場の空氣を背景にした今宵のさまざまな出來事を思ふと、これから死んだやうに寢靜まつてゐる寂しい我家へ歸つて行くのがまるで夢のやうに思はれてならなかつた。彼女はその晩ほどしみじみ我家といふものを呪つたことは今までに一度も覺えなかつた。

子がわ

一

その翌日の午後、初秋の薄い日射しのさし込んだ津崎家の奥座敷で、俊子は久しぶりに麻布の叔父と膝を突き合はせて四方山の話をしてゐた。

この叔父は俊子にとつて最も親しい肉親のひとりてさして頼りにはならないとしても父の死後は此の叔父が殘つてゐるといふ事だけでも松倉家の母子には少からぬ心強さを與へたのであつた。年齢も亡き父と四つ違ひの四十九て、つい三四年前迄は海軍少將として海軍部内で或重要な地位を占めてゐたのだが、政變の折鄕黨の渦中に卷き込まれて職を奪はれてしまうと同時に、自分からも進んで軍服と劍とを擲つて羈絆のない一市民の生活に身を投じてしまつた。そして以前から關係のあつた御用商人や、同時に退職した仲間の人達と一緒に遠洋漁業の會社を起して、その方て十分發展もし活動もする積りでゐたが、何を云つても手馴れぬ仕事なので成績も思はしくなく、その損失の負擔のために折角在職中に貯へて置いた少からぬ資産も殆んど全部をあげて蕩盡してしまつた。その後も鑛山へ手をつけたり、株に手を出したりしてその日その日を齷齪と送つてはゐるが、思ふ壺に嵌つた成功もなく、今では麻布の霞町に小ぢんまりした家を借りて後妻ともつかず、妾ともつかぬ妙な女と、それから其の女の腹に生れた二人の男の兒達と一緒に侘びしい生活をしてゐるのてある。そして彼がまだ軍人としての誇りを持つてゐた時代に死んだ先妻にも二人の子があつたが、男の方は父と同じ海軍の中尉て佐世保の要港に奉職してゐるし、その妹の治子は今にまだ獨身て遠い北海道の札幌て寂しい女教員の生活をやつてゐるのてある。

俊子は此叔父の影の薄いやうな疲れはてた姿をみる度に、彼女がまだ頑是ない子供であつた頃、嚴めしい禮服に身を固めて、亡き父と一緒に天長節の拜賀に參内していつた折なぞの時めいた美々しさを想ひ起さずにはゐられなかつた。その時分には叔父の身體の周圍に何處となく近付き難い威嚴があつて、抱いてやらうなどと云はれる度に彼女はよく泣いて遁げまはつたものてあつた。それが今てはもうその時代の面影は全然なくなつて、人懷い言葉の調子や、爺むさ

い半白の顎髭や萎えしをれた着物の外からみえる骨張つた肩の様子などをみると、彼女にはこの叔父が日一日と零落の方へ落ち込んでゆくやうに思はれて、云ひ知れぬ悲しさを覚えるのであつた。

話にひとわたり句切りがつくと叔父はやがて改まつた口調になつて、

「時に今日は少しお前に用があつて來たのだが、……實はさつきちよつと松倉へ寄つてな、お母さんからすつかりお前の話を聞いたよ。私も今度のことに就いてはいろいろ考へてゐることもあるが、それはまあ後の事にして、一體お前は何うする考へだな？」

「何うするつて、別に考へも御座いませんわ。何しろ良人の云ひ分が餘り亂暴で御座いますから、私には何ういふ風に自分の心を決めていゝやら薩張り分らないんで御座いますもの。」俊子は母親にも聞した頼りない返事を又叔父にも繰返して聞かした。

「さうだらうとも。さうだらうとも。」と、叔父は大きく合點いて、「誰れだつて現在良人の口から離縁などと云ふ忌まはしい言葉を聞かされてはちよつと去就

に迷ふに極まつとるさ。私とても今度の時之助さんの云ひ分には全然不同意ぢや。決して教育のある立派な紳士のなす可き事ぢやない。體が惡くなつた、さあお前はもう役に立たんから出てゆけ、それぢや何が夫婦だかまるで分りやせんぢやないか。そりや私達はもう頭が古いのだから今の若い人の考へは分らんかも知れんが、併しいくら道徳といふものゝ形が變つても、此社會が成つ立てゐる限り人間の踏む可き道だけは決して變る筈がないと私は思ふのだ……。」

二

叔父はごくりと咽を鳴らしながら又言葉を續けて、

「私が英國に行つとつた時分、彼國の紳士達は亞米利加が一番離婚の訴訟が多いと云つてひどく亞米利加人の道徳心の薄いのを罵倒しとつたが、私も全くそれには同感だつた。日本なぞよりも遙に人心が腐敗してゐると云はれとる外國が既にさうだ。それだのに家族といふものを根本にしてゐる日本の現在の社會で、離婚といふ事が何れ程賤しむ可きものだぐらゐは時之助さんなぞのや

うな高等教育を受けたものは十分承知してゐる筈だと私は思ふ。それも妻のお前が癈疾にでもなつたとか、破廉恥罪でも犯したとか云ふのなら或は已むを得ないかも知れんが、今度の場合は決してそんな事ぢやないのだ。私に云はせれば時之助さんの今度の仕打は全く良人としての義務も責任も何も知らぬ下等社會の人間のすることと同じだと云はんけりやならんのだ。」叔父はいつになく興奮して、眼の前に時之助を引据ゑて置いて詰るやうな調子で云つた。

俊子は昨夜ひと夜おちおち眠りもしなかつたので寐不足な眼を力なげに瞬、きながら、聞くのが辛いと云つたやうに低く俛首れて、返事もしずに膝の上で手を弄んでゐた。彼女の心には華やかな色と光に包まれた昨夜の劇場の光景や、毅の顏や、大洗海岸の砂丘や、過ぐる夜の恐ろしい良人の顏などが何等の統一もなく、連絡もなく、唯奇怪な火輪車のやうになつてぐるぐる旋轉してゐた。叔父の言葉がはたと胸をつく度にその妄想の映畫は暫らくの間途絶れるが、やがて又じりじりと少しづつ動きはじめて、彼女には現在叔父の云つゐることが自分のことではなくてまるであかの他人の上であるやうな氣がされるのであつ

た。そして不思議な取留めもない感情だけが譯もなく昂ぶつて來るのであつた。

叔父は暫らくすると急にまた言葉の調子を低めて、

「お母さんに聞けば時之助さんは何でも新橋邊の藝者に係り合つて、それが今度のことの原因になつてゐるのだといふぢやないか。果してそれが事實とすれば實に怪しからん話だ。人もあらうに藝者風情のためにお前を捨てるなぞとは以ての外のことぢやないか。それも二十歳代の若盛りなら兎も角、社會上にも立派な地位をもつてゐる體でゐながら餘り莫迦氣た話だ。もし眞實にさうだとすりや私はもうあの男の人格も何も認めん。離婚が何んなに忌む可きことであつても斷じて離婚してしまはなけりやならん。自分の潔白を證明する爲めに自殺までなさつたお前のお父さんの位牌に對しても、お前をそんな男の處へ遣つて置くことは斷じて出來ん。私の良心が第一それを許さんのだ。」

叔父はかう云つて燃えるやうな眼眸をしながらじつと俊子の横顏を瞻めてゐたが、俊子が一言も口をきかないので、暫らくすると張りつめた氣も緩んでゆ

くやうに漸次と白けた顔容になつて、老人らしく頬の肉をたるませながら、

「いや、實はお前のまへでは云ひ憎い事だが、私は今朝新聞でその藝者と時之助さんとのことをちよつと見たんだ。固より露骨に名前は書いちやなかつたが、何う見たつて確に時之助さんの事なのだ。何でも今度の大阪行きにはその女を一緒に連れて行つたといふんだが……。」

「まあ、さうで御座いますか？」俊子は初めて我に歸つたやうに顔をあげて、「眞實て御座いませうか。」

「さあ、噂の種といふやうな欄に十行ばかり書いてあつたんだから當てにはならんが、併し火のない處には煙は立たんからなあ。それに銀行の方の下役なぞに聞いて見ても誰ひとり時之助さんの辯護をする者は居らんし、あの銀行と取引をしてゐる私達の仲間の間でもひどく評判が惡いやうだから。」と云つて、叔父は冷たくなつた茶をぐつと一息に呷つた。

三

叔父はその儘妙に押默つて、考へ深い眼眸で俊子の眼のところをまじまじと瞻めてゐたが、暫らくすると重々しい聲で、

「そこで、さつきお母さんにもよく話して置いたんだが、いろいろ前後の事情を考へ合はせてみると、お前にとつてはまことに不幸な事に相違ないが、私の考へを露骨に云つてみればこの緣組はもう晩かれ早かれ當然離緣になる可きもののやうに思はれるのだ。今度はこれでうまく收まつたとしても、また直ぐに同じやうな問題が起つて來るに定まつてゐる。さうして此の次には猶一層困難な事件がその間に絡まつて來るに違ひないのだ。時之助さんも今のやうにしてゐれば近いうちにや屹度取り返しのつかんやうな失策を仕出來すに相違ない。或は今でももうそんな事を仕出來してゐるかも知れん。幸ひにしてそれが世間へ知れずに濟めばいゝが、もしその爲めにぱつと惡名を立てられるやうになつたらそれこそ一大事だ。お前までその爲に何んな辛い思ひをしなけれ

ばならんかも知れない。それて私に云はせればもうかうなつた以上は寧思ひきつて今のうちに斷然たる手段を執つてしまう方がいゝのだ。幸ひ彼方から申出してきた事だし、時期から云へば今が一番適當なのだ。」

「叔父さん。變なことを仰有るやうですが、失策つて何か惡い事でも致したんで御座いますか？」俊子は叔父の意味ありげな言葉を氣にして、不安な眼色をしながら口を入れた。

「いや、そんな事は萬無からうとは思ふが變な噂も聞くし、それにあの身持ちではなあ。ひよつとしてそんな事でも出來あがつたらもうお前としても取り返しがつかんからな。」と、叔父は態と事實を祕するやうに言葉を濁しながら、話を轉じて、「兎に角お前は此の場合何うしたが一番いゝと思ふんだな？」

「そりや離緣になるものなら仕方が御座いませんけど、併し折角かうして嫁いて來ましたもんですし、それに世間の外聞も御座いますからねえ。」俊子はまだ良人の失策と云はれたことを氣にしながら低い聲で答へた。

「いや、お母さんの心配してゐられるのも全くそこなんだ。離緣になつたといへば世間ぢや深い事情は知らずに何とでも云ふからなあ。併し事情がかうなつて來てみればもう已むを得んぢやないか。」

「そりやさうで御座いますけど、私の身としてはこれほど不名譽なことは御座いませんもの。」

「併しこの先にはまだそんなことより ずつと不名譽なことが起つて來るかも知れんのだぜ。……それにお前も今のうちなら譬へ離緣になつたつて善後の策を立てることも容易いのだ。年も若いし、足手まとひになるものはなし、再婚するなりなんなり勝手に出來るんだからなあ。」

「まあ、叔父さん。隨分な事を仰有るぢや御座いませんか。」俊子はさつと顏を赧めて、「私はもし離緣になりましたら、もう決して再婚なんか致しません。そんな恥かしい眞似が何うして出來るもんで御座いますか。」

「そりや何うでも構はんが……。」叔父は稍てれたやうな顏になつて、「兎に角一生の大事だからお前もよく考へてみるがいゝ。お前の意志でお前の體を旨く處分して行くことが出來ればそれが一番結構なんだから。併し人間といふもの

は適當な時期にちよいと手段を誤まると、それが意外な結果になつて報つてくるもんだからなあ。」

二人はそれでふつりと口を噤んでしまつた。

四

俊子はそのうちにふと妙な氣持ちになつた。昨夜から煙のやうな取留めもない形をして心の底に粘り着いてゐたことであるが、どうせ離緣になるものなら離緣になつても可いやうな氣がしてきた。今朝までは明白にその考へを確めることは出來なかつたが、今叔父からいろいろな入譯を聞かされてみると、かうして當てもないことを賴りにして漸次と救ふことの出來ぬ破滅の方へ沈んでゆくのが我ながら空怖ろしくなつてきた。離緣になつた後は何うするといふ目的はなくても、一日も早くかうした苦悶から遁れ出て自由な體になつてしまう方が遙に得策のやうな氣がされた。良人といふものがなかつたら自分のその日その日は何んなに安らかであらう！彼女はそんな事さへ考へるほど心

が熱して來た。さうとは知らぬ叔父は同情の溢れた眼で俊子の顏をみながら、嘆息を吐くやうな調子で、

「併し私はよく考へてみると今度のこともまるで夢のやうな氣がするのだ。お前と時之助さんと結婚した當座にや行末こんな事にならうとはゆめにも思ひも懸けなかつた。何事も運命であるとは云ふものゝ、私の考へではお前達夫婦の間には確に大きな缺陷があつたのだ。つまり子といふものが出來なかつたのが今度のやうな羽目になる原因になつたのだ。二人の間に子さへあれば、また別な愛情も起つて來るし、お互に責任といふものも感じて來るのだ。俗に云ふ子は鎹とは全く此處のことだ。子ほど確かな鎹はない。」と、諄々と訓すやうな聲で云つて、ふと何か思ひついたやうに、「いつぞやお前が姙娠したといふやうな話を聞いたことがあつたが、ありや眞實のことではなかつたとみえるな。」

「えゝ。」丁度病氣になる前のことでしたから、お醫者樣が誤診をなすつたんだらうと思ひますわ。ほんとに叔父樣の仰有る通り子供でもあつたら私もどんなにか心强いことで御座いませうねえ。」

俊子の頭腦からはその瞬時に離緣といふ問題が消え去つて、丸々と肥えふとつた可愛い嬰兒の姿が髣髴として浮あがつて來た。それは彼女の學校友達でさる醫學士の許に嫁いてゐる女の愛兒だつた。彼女は今迄に數多くの嬰兒を見たが、此の兒ほど可愛らしい兒は一度も見たことがなかつた。初めて校友會で友の手に抱かれたその兒を見た時、彼女は我を忘れて愛撫した。それからと云ふもの子供といふものを考へる毎にその兒が型のやうな理想になつて、もし自分が兒を生むとしたらどうしてもあんな兒を生みたいと希つた。そして美しいリボンやレースで花のやうに着飾らせて、自分の行く處へは何處へでも連れて行つて、逢ふ人毎に誇つて歩き度いとさへ思つた。

丁度今年の五月になつて、俊子はふとしたことから姙娠の兆候を發見した。恥かしさを忍んで診て貰ふと、醫師も確にさうとは斷言しなかつたが、十中七八まではさうらしいと診定した。今度こそ日頃の願ひが實現されるのかと思ふと、俊子は恐ろしいなかにも抑へきれぬ歡びと期待とを感じた。そしていろいろな小兒らしい空想を樂しみながら出產の日を待望んでゐると、そのうちに今

度の大病に罹つて、優しい空想も、實際の子供も嵐のやうな苦悶の渦卷のなかに消え去つてしまつたのである。

俊子は今の今迄忘れてゐた子供のことを思ひ起すと、昔の氣持ちがいつしかしみじみと自分の胸に歸つて來るやうな氣になつた。そしてやさしい感情はそれとともに次々と彼女の心を波立たせた。醫師は病氣の兆候を誤認したのだと云つても、今から考へてみると彼女にはあの時どうしても可愛いゝ子が自分の胎内に宿つてゐたやうに思はれてならなかつた。一度宿つてゐたものが、その時の儘の姿で今も猶ほ自分の體の何處かに殘つてゐるのではあるまいかと思ふと、彼女は手術をした創痕の邊にそれらしい肉塊が蠢めいてゐるやうな錯覺さへ覺えるのであつた。

五

「併し今茲で離緣になるとしたら、お前は一體何うする心算だな。再婚はせんと云ふのならそれも已むを得んが、まあよく考へても見るが好い、二十二や二十

三でこれから先一生涯獨身で暮らすといふことが果して出來るかな。口で云ふのは譯もないが、いざとなると餘程の覺悟が要るぜ。」叔父はしんみりした聲で云つた。

俊子はその聲も耳に入らないやうにうつとり眼を据ゑて宙に浮んだ嬰兒の幻影を凝視してゐたが、覺悟といふ言葉が一言胸を衝くとふと眼が覺めたやうに叔父の顏を見ながら、

「え、叔父さまの覺悟つて何んで御座います？」

「いや、離緣になつた後の話だ。そこいらの考へも今から少しづつ決めて置かんけりやならんからなあ。」

「再婚でもしろと仰有るんですか？」俊子は冷たい顏をして云つた。

「いや、私は再婚する方がお前のために幸福だらうとは思ふが、併しそりやお前自身のことだから、私から强つてさうしろとは勸められんのだ。」

「そりや叔父様が何と仰有つても、私は決して再び緣付くなぞと云ふことは致しません。こんな體になつてゐながら、何うしてそんなことが出來ませう。私

は一生獨身で暮らす心算で御座います。」俊子は如何にも思ひ入つた顏色を見せて云つた。

「併し最後までその考へを徹していければいゝが、これから先の一生は隨分長いからなあ。此際餘程覺悟を決めて置かんと……。」

それを聞くと俊子は神經的に眉を顰めながら突如その言葉を引取つて、

「その覺悟はもうちやんと決めて御座います。叔父様方は何う思召して被居やるか分りませんけど、女はそこへいくと案外强いもので御座いますからねえ。殊に私のやうにあんな良人を持つて辛い思ひをしたものは、もう男といふものに懲りて居りますから。」と云つて、まじまじしながら考へてゐたが、やがて何かいゝ考へが胸に浮んだと見えて急に元氣づきながら、「もし離緣になりましたら、私北海道へ參りますわ。」

「なに、北海道へ？」叔父は驚きの眼を睜りながら云つた。

「え、北海道へ行つて、治子さんの被居やる處へ參ります。さうして彼地で學校の教員でもして、一生寂しく田舍で埋もれてしまう心算で御座いますわ。こん

な東京なんかにゐて、耻を曝らして歩くよりも何んなに可いか知れません。人眼にさへ立たなければ恥かしい思ひもしずに濟みますし、それに私といふものが死んでしまつたとすれば母も斷念めて呉れませうから。」さう云ふうちにも俊子の胸には自分の言葉に刺戟されて妙な感情が無上に込みあげて來て、雙眼にはいつしか涙が一杯に溢れてきた。

叔父はその樣を見ると、自分も悲しさうな顏になりながら、

「そんな事が出來るものか。そりやお前の空想だ。」

「いゝえ、決して空想ぢや御座いません。私はきつとさう致します。だつて治子さんだつて彼樣してたつた一人で暮らして被居るぢや御座いませんか。」

「いや、彼女とお前とはまるで境遇が違ふ。……併しもう彼女の話だけは止めて呉れ。私は彼女のことを云ひ出されると全く自分から耻なければならんのだから。」と、云つて、叔父は急に傷ましい顏つきになりながら、愚痴をこぼすやうな低い聲で、「彼女をあんな遠い北國の果へ追ひ遣つたのは全く私の罪なのだ。私が盛んな時分に早く嫁けてゞも置けば彼女だつて辛い思ひをしずに濟んだの

だ。獨立、獨立と手紙なぞぢや強いことも書いて寄越すが、あゝして遠い處で寂しく暮してゐる彼女の肚の中は何んなだらう。私はそれを思ふと可哀想でならんのだ。何うにかして呼び返さうとは思ふのだが、今の私にはそれさへ出來んのだからなあ……。」

六

二人はそれから長いこと打沈んで濕つぽい話に時の過ぎゆくのを忘れてゐた。當面の離婚の話も、善後策の話も、いつか話題から外れて、取り留めもない愚痴のやうな言葉だけが次から次と續いて行つた。叔父は治子のことから到頭亡なつた叔母のことまで云ひ出して、過去つた時代の思ひ出に耽つてゐたが、ふと時の經つたのに氣付くと、急にそゝくさ歸り支度をしはじめた。

「まあ、お宜しいぢや御座いませんか。ほんとに久し振りで御座いますから、下手な手料理でなんですけど、お夕餐でも召食つてらしつて下さいましな。」と、俊子は其袖を抑へるやうにして引留めた、

「いや、有難う。併し今日は商賣の用で日本橋の方へ廻らなくちやならんから。……私も今度こそひとつ盛返さうと思つてな、此頃又新しい事業に手を出しとるものだから、どうも忙しくてな。」

「お忙しいのは結構ですわ。まだいろいろ伺ひ殘したお話しも御座いますし、それに久し振りて叔父様のお酒のお相手もして見度う御座いますわ。」

「はゝゝゝ。酒か。」と、叔父は大きな口を開いて聲だけで笑つて、「私も此頃少し腎臟を惡くしたもんだから、好きな酒も飲めんよ。」と云つて痺れの切れた膝を擦りながら起ちあがつた。

いくら留めてみても聞かないので、俊子も力を落して、寂しさうな顏をしながら玄關まで送り出した。そして色の褪めたみすぼらしい外套を後から着せかけてやりながら、

「伺ひ遲れましたが、お宅では皆さんお變りも御座いませんか。」俊子はふと叔父の妾ともつかず、正妻ともつかぬあの肥つた若い女や、男の兒達のことがその時初めて心に浮んだので、何の氣もなくかう訊ねてみた。と、叔父はその言葉と

一緒に不快らしい顏色になつて、

「有難う。まあ壯健で暮らしてはゐるが。……私の家庭もそのうちに何うにかして大改革をせんければ、……」と、獨語のやうに云つて、そのまゝ靴脫石へ降りた。そして勢のない聲で「左樣なら」を云ひ殘して、肩寒げな後姿を見せながらぽくぽく戸外へ出て行つた。

俊子は送り出してしまうと今度は奥座敷へは歸らずにその足で良人の書齋へ入つた。そして妙に疲れはてた體を何をする元氣も失せたやうに安樂椅子の上へぐたりと投げ懸けた。

暮を急ぐ秋の日はもういつしかとつぷりと黄昏てきた。硝子窓から流れ込んで來る橙黄色の光はそこらにあるものを悲しげに彩つて、何處か遠い町の方からは子供達の群遊ぶ聲と、豆腐屋の喇叭が微かに聞えて來る。俊子は思ふともなく麻布の佗住居へしよんぼり歸つてゆく叔父の姿などを思ひ續けてゐたが、そのうちにやがて又離緣のことが胸一杯になつて來た。そして今度はもう津崎家から緣が斷れて、舊の松倉俊子に歸つた自分の姿が心の底に立迷つてゐ

た。その自分は治子とたつた二人ぎりで見も知らぬ札幌の町を歩いてゐる。話に聞いたアカシヤや楡の並樹は行くてに際涯もなく續いて、眞紅な夕陽が綿のやうな雲の峰を悲しげに染めてゐる。二人とも口も利かずに寂しい運命を泣きながら歩いてゐるのである。

斯んな想像を浮べてゐるうちに俊子は矢も楯も耐らないほどあの沈默家の治子が懷かしくなつて來た。何は扨て置き治子にだけは今の實情をすつかり打開けて訴へ度くなつたので、その儘すぐに手紙を書かうと思つてゐると、そこへお菊が扉を開けて入つて來て、默つて二通の郵便を置いて行つた。

一通は寶塚溫泉から寄越した良人の繪葉書だつた。「一昨夜無事着阪、歸京期二三日延引すべき豫定に候」と、膠もない文言を醉つたやうな字で毆り書きにしてあつた。俊子はそれを見ると叔父の云つた藝者連れのことを思ひ出して、罪もない葉書を眞二つにびりびりと割いても捨て度いほどの腹立たしさを覺えた。そしてその藝者を前に置いて良人が葉書を書いてゐる場景を思ふと、彼女は思はずきりつと唇を嚙み緊めた。

他の一通は杉浦からだつた。その表書を讀んでゐるうちに、俊子の頰にはみるみる血の氣がさして來た。

七

いつにない嚴重な封をきつてみると、中からは四つ折りにした薄い書簡紙が三枚ばかり出て來た。その面には例の踊つたやうな字がペンで走り書してあつた。

初めの方には昨夜帝國劇場で久し振りに俊子に逢ふことの出來た歡びや、そのほか演劇に就ての感想などがこまごまと書いてあつたが、半から先になると毅は房子のことを云ひ出して、ひどく興奮した調子で妙な告白めいたことを書いてゐた。

「……僕はいまほんとうにあの房子を捨てようと思つてゐる。あの女の美しい眼も忘てしまひ度い。あの女の紅い唇も忘れてしまひ度い。あの女が僕に與へたすべての思出を永久に僕の心から、拭ひ消してしまひ度いと思つてゐる

のです。何故とならばあの女は今僕の首に重い枷を置かうとしてゐる。僕を縛らうとしてゐる。しかもそれは僕を今まであの女の胸に繋ぎとめてゐた眼に見えぬ愛情の絆ではなくて、結婚といふ重い鎖で縛りつけようとしてゐる。確にあの女の感情は墮落しました。陽炎のやうに美しく燃えてゐた愛情が到頭末路に到達しました。もうこれから先は單に利害關係のみに依て僕達二人は繋がれてゆくのです。僕は到底その寂しさに堪へられません……。

「僕は今夜といふ今夜、しみじみ孤獨といふものゝ寂しさを知りました。僕は今たつた獨りです。僕の眼の前には更け靜まつた暗い夜が限りなく擴がつてゐるばかりです。房子に對する甘い思ひ出は僕の心に殘つてゐながら僕の胸は或幻影のために强く强く躍つてゐます。僕の意志はその幻影の方へ手を差延べて、どうかしてそのなかに潜んでゐる實在を手弄らうとしてゐる。若しその實在が僕の指先に觸れたとしたら何うてせう。其時こそ僕の眞の自分が眼覺めて來るのです。社會の理法が何んだ、慣習が何んだ。そして道德といふやうな重い安全瓣や、法律といふやうな絶對の抑壓ももうその時になつては何の

役にも立ちますまい。僕は如何なる罪でも平氣で犯すでせう。譬へば殺人といふやうな恐ろしい犯罪でも……。

「今柱時計が午前二時を打ちました。暗闇の中へ消えてゆくかすかな秒刻の音を聞いてさへ、僕の心は果しもない寂しさに熬だつて來ます。僕はこんな熬だたしい、そしてもう一歩進んだら聲をあげて絶泣したいやうな不思議な氣持ちで貴女に手紙を書かなければならないことを深く深く恥ぢます。すべての人間の寢靜まつたこんな夜更けに唯一人眠ることも出來ずに手紙を書きつゞけてゐる僕の女々しい姿を想像してみて下さい。僕は全く今何を考へてこんなことをしてゐるのだかまるで分らない。何を考へて、何の爲めにあなたにこんな手紙を書かなければならないのか自分ではまるで分らないのです。併し僕はすべてが明白に分つて來る時を恐れます。僕の頭のなかに混亂してゐるすべてのものが統一され、一つの焦點に向つて燃え上つてゆく時を恐れます。そしてそれが抑へきれぬ力を以て僕の行爲にまで表はれて來たとしたら何うてせう。その時こそ僕は破滅です……。」

こゝまで讀んで來ると俊子ははっとして手紙の面から眼を逸らした。彼女の頰はいつの間にか火のやうに燃えて、きつと結んだ唇は細かくぶるぶると打慄へてゐた。

彼女の心にはやがて或恐ろしい思考が根強く瀾つてきた。ひよつとしたらあの毅が自分を戀してゐるのではあるまいか、と氣付くと、彼女は今迄に覺えぬ惑亂を感じて、思はず肩を竦めた。そして時々氣狂ひのやうになつて築山の高い崖から飛び降りたり、獵銃で飼犬を撃殺したりした少年時代の毅の不思議な氣象を思ひ返すと、今でも面は平靜に思慮深く見えてゐても心の底では何んなに熾な情火が燃えてゐることであらうと思はれて、彼女はふと毅が恐ろしくなつて來た。そして恐ろしいながら毅の心の何處かに口には云へぬ魔力が籠つてゐて、自分の心が今迄よりも更に強い力でそつちの方へ知らず識らず惹きつけられてゆくやうな不思議な氣もするのであつた。

冷めたき影

一

良人の時之助が大阪から歸つてくる前に俊子の實家では三度ほど親族寄合ひが開かれた。事情がよく分らないので無論親族の誰彼はいづれも離緣を不可とした。麻布の叔父だけはそれでも將來のことなどをいろいろと例にひいて、いつそ今のうちに賴りにもならぬ見込みのない時之助から俊子を引離してしまう方が得策だと云つて、頻りに自分の考へを主張したが、媒人の遠藤博士は一も二もなくその說を却けた。そして度なが上、十分忠告もしてひとまづ博士自身時之助に逢つてみた度が三ら不得要領で物別れになつてしまつた。

俊子は其間に大方決心もついたので、自分では離婚になつても何うにか將來のために執るべき道はあるやうに思へた。世間では何と云はうとも、自分さへ疚ましい所業がなければ恥かしいことは少しもない、といふやうな確實な思考が少しづゝ彼女の胸にも根を下ろしてきた。そして毅のことを思ふと、何とな

く親身な同情や保護が身のまはりに集まつてくるやうで、溫かい氣持が自と彼女の胸に通つて來た。

さうかうしてゐるうちに時之助は丁度豫定よりも二日早く大阪から歸つて來た。東京へ着いたのはまだ宵の口だつたが、格別報らせもなかつたので、津崎家からは迎ひも何も出さなかつた。

「お歸りッ。」といふ聲に驚かされて松田が飛び出してみると、薄暗い玄關の入口に時之助は氣のぬけたやうな勢のない顏をして突立つてゐた。

俊子はお菊の報らせに驚いて、しかけてゐた縫ひものを置いて玄關へ出てみたが、妙に胸が踊つて口がきけないやうなので、

「お歸り遊ばせ。」と、低い聲で挨拶をしたばかりで、開き戸の片陰へ隱れてしまつた。

良人は默つてその儘書齋へ入つて行つた。そこでお菊を相手に着換へをすますと、すぐウキスキイを命じて、瓦斯暖爐の前の安樂椅子へ坐つてちびちび飲みはじめた。

俊子は幾度か書齋へ入らうと思つて、足音を忍びながら開扉の傍まで歩いて行つたが、何うしても氣臆れがして把手へ手をかけることさへ出來なかつた。鍵の穴からそつと覗いてみると、良人は椅子の椅脊に頭を凭せかけては、時々盃を唇へ持つてゆきながら何か深い思ひに沈んでゐるらしい恰好をしてゐた。一處を見詰た眼の底には憂慮が充ちみちて、全體の表情にも暗い色が漂よつてゐた。

軈て彼は何か用でも思ひついたのか、突如激しく呼鈴を鳴らした。俊子はそれをきつかけに中へ入らうと思つたが、良人の氣が分らないのでもぢもぢ躊躇つてゐると、そこへお菊が小走りにやつて來た。そして不審さうに俊子の容子を見ながら開扉をあけてなかへ入つて行つた。

なかでは暫らくの間ごとごと低い良人の聲が聞えてゐた。と、やがて聞耳をたててゐる俊子の耳へ、

「奥さんは何うした。若し手がすいとるなら一寸此處へ來いと云つて呉れ。」

といふ良人の言葉がはつきり聞えた。豫想外に穏かなその語調を聞くと、俊子

は何んだか却て張合ぬけのしたやうな氣持ちになつたが、やがてそれに力を得てお菊と引違へに室内へ入つて行つた。

二

良人は俊子が入つて來るのをみると、急に體を眞つ直に延ばして虚勢を張るやうにしやんと身構へしたが、それでも聲だけは何處か優しみをもつて、

「隨分長く家を明けたが、留守中には別に變りもなかつたかね？」と訊ねた。

「は、別に。」俊子はをどをどしながら答へたが、良人の容子が大阪へ行く前とはまるで變つてゐるので、思つたよりも氣安い心持ちて彼の面前へ立つたことが出來た。

良人はその儘暫らくの間、松倉家のことや彼女の體の容子などをそれとなくぽつぽつ訊ねてゐたが、話の種が盡きると到頭問題は避くべからざる道筋をたどつて離婚の問題に落ちていつた。良人は一段と聲を落して、

「實はあの事に就て、もうお前の考へも大方決まつたらうから、それを聞かして

貰ひ度いと思つてお前を呼んだんだが……。」と云つて、態と重々しく眉を顰めながら、「一體お前の考へでは俺の云ひ分を何う思ふね？」

俊子は暫らく考へに沈んで返事をしなかつたが、やがてついと顔をあげて、

「兎に角私としてはもう申上げることは御座いませんですから……」

「ふむ、ぢや離婚に不承知はないのだね？」時之助は妙に未練がましく云つた。

俊子はその言葉を聞くと急に顔色を動かして、

「たとひ私の方で不承知だと申した處が仕様がないぢや御座いませんか。貴方があれまでに仰有つたんですから、私の方では貴方のお考へ通りになるより外には致しやうが御座いますまいと思ひます。」さう云ふ言葉の底にはもう何うなつても遺憾はないと云ふ確な諦めが見えてゐた。

「さうか。それでよく分つた。俺も今度はひとつ思ひきつて周圍の事情を排して、財政の方の整理もせんけりやならんのだから……。」と、良人は張合のぬけた顔つきをしてぐとぐと呟いてゐたが、やがてまた俄に肩を張つて、

「兎に角お前の決心もさう決まつたんなら非常に好都合だ。お互にそれで氣

拙い思ひをしなくても濟むのだからな。雙方で自分の位置を理解して立派に別れてしまうと云ふことが此際一番望ましいことなのだから。」

俊子は何かそれに答へようとして顔を擡げたが、良人は彼女には口をきかせなかつた。意地の惡さうな瞳を据ゑて、その言葉を睨みかへすやうにきつと彼女の唇のところを見詰めてゐた。

俊子にはその時、良人の胸に宿つてゐる考へがありありと讀まれるやうな氣がした。何かの事情で良人はまた離婚を思ひ止まつたのだ、若し此際自分が以前のやうに良人に頼り縋る態度を見せたならば、良人は忽ち自分を強壓して反對に自分の方から離婚にならないやうに哀願させるやうな風に仕向けるであらう。つまり弱い自分を飽く迄玩弄にして、彼自身の威嚴を傷けまいとするであらう。俊子はこんなことまで考へられるほど落着いてきた。

良人はその儘ウキスキイをぐいぐい呷りながら默つてゐたが、俊子が一言も話の緒を開かないので到頭いらいらした焦躁しさを眼に輝かして、聲まで荒らげながら、

「兎に角さう決心がついたんなら、早速實行に取懸らうぢやないか。これからすぐ電話をかけて松倉のお母さんや遠藤さんにも來て貰はう。そして今夜のうちに荒方話を決めてしまうんだ。」

「そんなにお急ぎにならないだつて可いぢや御座いませんか。それに遠藤さんはもう一度貴方に逢てようく話を聞いて見たいと仰有つて被居るんですから……。」

「そんな必要はない。俺はこんな事件にいつまでも拘はつてゐられるやうな閑な體ぢやないんだ。決まるものは早く決めてしまつた方がさつぱりして可い。」

「でも今夜は餘りですから……」

「いゝや。斷じて可かん。俺達の間にはそんな餘裕はありやせん。」良人は駄駄ッ兒のやうにいらいらして、矢鱈に酒ばかり啜つてゐた。

三

良人は何う云つても聞かないので、俊子はやがて心をきめて松倉家へ電話をかけた。

母親は自分から電話口へ出て來たが、俊子の云ふ處を聞くと、これもひどく當惑したやうな聲になつて、せめて明朝まで待つて呉れるやうにと云つた。俊子は母親の聲を聞くと急に胸が一杯になつて來て、思ふことの十分の一も口へは出て來なかつた。母親もしまひにはそれと察して、兎も角も遠藤博士を煩はして直ぐさま一緒に津崎家へやつて來ることになつた。そしてその談合の席へ俊子が居ては却て爲めになるまいと云ふので、俊子にはその間だけ實家へ遊びに來てゐろと命じた。

俊子はその返事を良人へ傳へて、その儘自分の居間へ引退つた。母親達に逢つてから實家へ行かうとは思つたが、矢も楯も耐らないやうな氣がするので、彼女は自分から簞笥をあけてそこに着換へを濟ました。そして良人に氣ど

られぬやうにこつそり家を忍び出た。

山王下の眞闇な通りへ出ると、今迄押し堪へてゐた涙が急に込みあげて來て、彼女は人知れず啜泣きしながらとぼとぼと歩いて行つた。月もない闇夜なので、眼の前に掩ひかぶさつて來る樹立の姿も黑々と物凄く、邸々の門燈の光だけが僅かに道の處どころを薄明るく照し出してゐる。そして人通りも殆んどないので、四邊はこそりとも音のせぬ靜けさに掩はれて、彼女の足音ばかりが際だつて大地の面へ響いてゆく。

彼女の心には母親や遠藤を相手に無法なことを云ひ續けてゐる良人の醉顏が映つてゐた。明るい客間の電燈の光のなかで各自の顏は怒氣を含んで、頻りに自分の運命を云ひ爭つてゐる。その一言一句が皆自分の將來の運命を左右するのかと思ふと、彼女はさすがに今自分が或危險の瀨戸際に立つてゐるのを怖ろしく思はない譯にはいかなかつたが、併し彼女の胸には今それ以上の或ものが湧き起つてゐた。彼女はかうした場合、ふと毅の名を思ひ浮べると、何とも知れぬ溫かい氣持がすべての情感を押除けて湧き上つて來るのであつた。

路はいつの間にか左へ逸れて、彼女は自分でも氣づかないまに溜池の通りへ出てゐた。乘客の頭數も稀な電車は徒らに明るい光を輝かしながら幾臺となく彼女の側を疾風のやうに駛り過ぎて行つた。がらんとした大路の片側に軒を連ねた待合では粹な植込みの葉蔭にしつとりとした灯影が見えて、ともすると浮いた紘歌の聲が何處からともなく洩れ聞えてくる。そして或家の門口では客を送つて出た美しい藝者や雛妓がほの暗い軒燈の陰で噪いだ戯言を聲高に云ひかはしゐる。

彼女の心にはやがて餘りに冷たい世間の有樣だけが強く強く責め寄せて來た。これだけ多勢の人々が自分の周圍を取圍んでゐながらそのなかで誰ひとり眞實自分の境遇を知つて呉れるものはないのだと思ふと、彼女の頰には又新たな涙が流れてきた。もう名譽もいらない自分もいらない、唯この儘何處か遠い遠い鄕國へ遁げて行つて、そこで眞實賴りになる人の膝に縋つて泣けるだけ泣いてみたいと云ふやうな突詰めた氣になりながら、彼女は何處へ行く當てもなく赤坂見附の方へ歩いて行つた。

赤阪見附まで來かゝると俊子は黄い砂塵と一緒にお濠の面からさつと吹き上げてくる寒い風に吹き廻されて漸う我れに返つた。寒氣は澄みきつた晩秋の空に充ち溢れて、裾や袖口から容赦もなく犇々と滲み入つて來る。彼女はがたがた慄へながら今度は道を取り直して麹町の實家の方へ歩いて行つた。

電車の交叉點を踏みきらうとすると、その時、彼女は薄暗い停留場の處にふと春の高い洋服姿の紳士を見つけた。最初は眼を疑つたが、それとなく傍へ近寄つてみるとそれは思ひもかけぬ毅だつた。眞黒な外套の襟を立てゝ片手には何やら小さな包みを下げてゐる。

彼女は餘り意外なのでひどくわくわくしながら、彼の方へ近寄つて行つた。

と、毅の方でもそれと氣づいたらしくちよつと帽子に手をかけてつかつか歩み寄つて來て、

「先日は失禮しました。」と、例の無雜作な調子で云つて、「今頃何處へ行んです？」

「え、鳥渡そこまで……。」俊子は突差の間に返事をし兼ねてどぎまぎしながらやつと此れだけ云つた。そして毅の視線を避けながら、

「あなたは何方へ？」

「僕はこれから宅へ歸らうと思つてゐるんですが、あなたは眞つ直上へあがるの？」

「え、松倉へ廻る用が御座いますから。」俊子は待設けてゐたやうに答へた。

「さう、それぢや丁度いゝ。そこまで一緒に行きませう。」

二人は後から來た電車をやり過ごして、その儘眞闇な阪路を麹町の方へ上つて行つた。

毅は途々今夜赤坂のさる料理屋で同窓の法學士連の會があつて、出席するにはしてみたがちつもと面白くないので膳が出ると間もなく脱けて歸つてきたことを取留めもなく話した。そして問はず語りにさる大會社から就職口のかかつて來たことを云ひ出して、そんな愚劣な一會社員の生活に縛られるより若い間だけ歐羅巴へ行つて思ふ存分な生活をやつてみたいといふやうなことを

いつにない浮々した調子で俊子に話して聞かせた。

俊子は唯毅にふと出遇はしたことが嬉しくて、彼の云ふことも一々身につまされるやうに聞きなされた。かうして眼の前に一生浮沈の瀬戸を控へてゐながら毅とたつた二人ぎりで眞闇な路を歩いてゆくことが何かの約束事のやうに思はれて、今まで心の底に膠着いてゐた暗い悲しみが、一足ごとに消えていつた。それと同時に毅に對して持つてゐた淡い不安や恐怖の念は根こそぎに消え去つて、振分髪の時代に馴れ睦んだやうな至純な親しさが彼女の心に限りもなく甦つてきた。彼女は抑へきれぬ嬉しさに唆られて足の運びまでが輕くなつてきた。

杉浦の邸近くなると俊子は今夜こそどうしても自分の今の境遇をすつかり毅に打開けてしまはなければゐられないやうな氣がするので、いらいらしながらその機會を待つた。毅も別れ度くなさゝうな氣振りをみせてゐたが、高い土塀と鐵柵の續いた邸の前まで來かゝると、到頭立止まつて、遠慮深い聲で、

「何うです。鳥渡宅へ寄つて行きませんか。尤も今夜は婦人會で母も嫂も華

族會館へ行くとか云つてゐたから、誰も宅にはゐませんけど。」と云つた。

俊子は心持ちとはまるてそぐはぬ調子で、

「でもお邪魔になりやしなくつて？」

「いゝえ、僕はどうせ暇なんだから。」

さう云ひながら毅はづかづか鐵門の中へ入つて行つた。俊子はそれをみると何を思ふ餘裕もなくいそいそしながら彼の後に隨いていつた。敷きつめた玉川砂利の上に軋む二人の足音は馬車廻しの樹立の影からしんとした邸の奥の方へ漸次と消えていつた。

五

大構への内玄關へ入ると、毅は出迎へに出て來た小間使達に命じて、俊子を自分の書齋へ案内させた。子供の時分から來慣れた處ではあるが、今年になつて新たに應接室や食堂などがすつかり改築されたので、俊子にはちよつと案内が分らなかつた。殊に夏子が結婚してから後は杉浦家を訪ねる機會も少くなつ

たので、俊子にはすべてのものが馴染が薄く、贅澤を凝らした大玄關の廣間や、美しい敷物をしきつめた階段などをみると昔とはまるで似てもつかぬ冷たさが流れてゐるやうにさへ思はれるのであつた。

毅の書齋は大玄關から眞直に續いた大廊下の端れにあつた中庭に面した天井の高い西洋室で、二つの窓からは見覺えのある庭の樹立越しに廻椽の續いた座敷座敷が小さく見えてゐる。久しい以前から中風で半身不隨になつてゐる毅の父の病室は奥まつた別棟になつてゐて、そこの小窓から射すかすかな燈だけが池の水にちらちら映つてゐる。そして室内は何處となく莊重な日本風の庭園の趣とはまるで反對に、暗綠色の窓掛から、金文字入りの書籍のぎつしりつまつた大書棚、卓子、椅子、それから壁にかけた版畫や油繪の額や、小卓の上に置いた彫像などに至るまですべて毅の趣味に依つて支配されてゐた。殊に彼は近頃の美術に偏つて嗜好を持つてゐるので、こまこました飾りものゝ中にはいかにも奇怪な繪畫や彫塑や不思議な模樣を描いた陶器などが多かつた。

俊子は小間使がつけてくれた暖爐の傍へ行つて、そこの椅子へ腰を卸した。

そして冷えきつた頰や手を溫めながら室内の樣を見まはしてゐると、その時ふと池へ落ちる噴水の音が喘ぐやうにかすかに聞えて來た。彼女の心にはその音と一緒にすぐ窓の下に廣がつた芝庭や、その上で夏子や毅達と樂しく遊び暮らした幼年の日の思ひ出がまざまざと描きだされてきて、變りはてたこの邸のなかで唯一つ昔に變らぬ懷かしいものを見つけだしたやうに彼女は一心になつてそのかすかな水音に耳を傾けた。

毅はやがて平常着に着かへて入つて來た。そして何と思つたか洋燈形の電燈を態々仕事卓から眞中の大卓へ移して、天井の電燈を消してしまつた。綠色の笠から流れ出る光は今まで明るかつた室内を妙に陰鬱にして、美しい陰影が方々の物陰に限りなく描き出された。

「このくらゐの明るさが丁度いゝ。」毅は獨語のやうに云ひながら俊子と對向ひの腕椅子に坐つて、「僕は明るいのが嫌ひでね、餘りぎらぎら明るいと頭が痛くなつて來るんです。」

俊子は美しい齒並をみせて微笑んでゐたが、やがてぼうつとした四邊を眴は

しながら、

「でも大層立派な御普請が出來ましたことね。私こちらの西洋館の方は初めて拜見するんですよ。昔とはまるで違つてしまひましたわねえ。」

「えゝ。」と毅は嘲るやうに云つて、「併し餘りいゝ意味の立派さぢやないでせう。こりやすべて母の趣味でね、母は何でもてこてこしたものを建てゝその中で貴族ぶつて生活してゐられさへすりや滿足してるんだから。」

「まあ、隨分ですことねえ。」と云つて俊子は又微笑んだが、すぐに自分の話に移る譯にもいかないので、機をつくる心算で、

「房子樣の方のお話は何うなりまして？」

毅はそれを聞くと思はず顏を赧くしたが、それを押し消すやうに、

「無論あの方は斷りました。母なんぞはひどく不服だつたんですけど、僕が厭だといふものは仕樣がないんでねえ。」と、早口に云つてまじまじ考へてゐたが、やがて、「併しあの女にも困りますよ。もうすつかり筋道の分つた話だのに、今でも毎日のやうにいろんなことを云つて來るんです。今日も何だか變な手紙を

寄越したが、厭てなかつたらみて下さい。」

毅はその儘椅子から起ち上つて、仕事卓の抽斗から肉色の封筒へ入つた一通の手紙を出してきた。

六

俊子は何だか他人の祕密を偸視るやうな濟まぬ氣がするので、躊躇ひながらそつとなかを開けてみた。同じ色の書簡紙に殆んど年頃の女とは思はれぬやうな拙い手蹟で何やらごたごたに書き連ねてあつた。私は全く絕望した、この結婚が成立たぬうへは、一生を賴んだあなたといふ戀人も捨てゝしまはなければならぬ、私の前途にはもう希望もなければ光明もない、唯冷たい涙と死とが殘つてゐるばかりだ、私はもう短銃を手に握らせられた、このうへはその引金に指を觸れる時を待つばかりだ、といふやうなことが最も拙く誇張された言葉で繰返しくり返し書き添へてあつた。

ざつと讀み終ると、俊子にはどうも書いてあることが胸に響かなくて、それよ

りもこれを書いた房子の卑しい心根の方が先に見透くやうな氣持ちがした併しさうと割つても云へないので毅の顔をみながら約ましやかな調子で、

「ほんとにお可哀想ですわねえ。これほどお書きになるくらゐなんだから、さぞ絶望なすつて被居るんでせうねえ。」

それを聞くと毅は又嘲るやうに笑つて、

「ふむ、これが人を可哀想と思はせるやうな手紙でせうかねえ。僕はよくこんな嘘がのめのめと書けると思ふ。第一絶望して自殺をしようといふ女が、手紙でこんな前觸れをするだけの餘裕を持ち得るでせうか。僕は決してさうぢやないと思ふ。自殺の動機は煩悶なり絶望なりが絶頂に達したその瞬間にふいと起るものです。もし僕をさういふ境遇に置いたら手紙なんか書く暇に彈丸を眉間へ撃込んでしまひます。その方が未練が殘らなくてどんなに立派だか分りやしない。」と云つて毅は熱つぽい眼つきになりながら俊子の眼のところをきつと瞻めた。

俊子はその時ふと父が自殺をした晩のことを思ひ出して強い恐怖に襲はれ

たが、

「でも房子様はほんとに自殺をしようと被仰るんぢやないんでせう。自殺してしまひ度いほど絶望してゐるといふ意味なんぢや御座いますまいか。」

「いや、恐らくそれほど絶望してゐますまい。房子は決してそんな女ぢやないんです。こんな手紙を書いてゐながら、今頃は何處かの劇場へでも行つて、下らない男を相手に噪ぎまはつてゐるでせう。」

毅は急に沈痛な顔色になつて默り込んでしまつたが、やがて今度はひどく興奮して眼尻を細かく痙攣させながら靈魂と靈魂とが結びつく眞の戀愛や、結婚は戀愛の墮落であることや、人生の背景となつてゐる暗い運命などといふやうな極めて高遠な議論を熱に浮かされてゐるやうな調子で次々と語りはじめた。そして結論はいづれの點からも人間は常に自由でなければならぬといふ格言めいた一言に落ちて行つた。

俊子は毅のいふ一言一句がいつになく身にしみて聞かれた。そしてその言葉の裏に潜んでゐる毅の思惑がいつも自分の上に懸つてゐるやうなのを感じ

ると、時々は胸が躍つて思はず顔が熱してきた。そして毅が結婚といふものを完膚のないまでに罵倒し盡くしてしまうと、その機をみて彼女は到頭離婚のことを彼に打明けてしまつた。毅は離婚といふ言葉を聞くと呆れたやうな顔をして俊子の顔をじつと見返した。餘りに思ひ懸けない出來事なので、さすがの彼も眞僞を疑つたのであらう。そしてその次の瞬間には何うしたのか彼は耳の附根まで眞紅になつて急に口を噤んでしまつた。

七

俊子は今度の離緣談の概略をそれからそれと順を追つて物語つた。良人の放埒なことや、自分に飽きたこと、それから何んな沒義道なしかたで離緣を申し込んで來たかといふやうな事まで包まず隱さずすつかり打明けて話してしまつた。そして話が今夜の思ひがけない出來事にまで及ぶと、彼女は急に胸が迫つて思はず雙眼に涙を濕ませた。

毅は始終陰鬱な眼つきをして聞き入つてゐたが、話が途斷れると重々しい聲

て、

「全く世の中のことゝ云ふものは思ひがけないものですねえ、僕は貴女こそほんとに幸福な生活をしてゐる人だと思つてゐたのに。」

俊子はそれをきくと微かに笑つて、

「なにが幸福なことが御座いますものか。私は結婚しまして以來、たつた一日だつてほんとに面白いと思つて暮らしたことは御座いませんわ。それに今になつてこんな恥かしい體になつてしまつて……。」

「だけどまだほんとに離婚になつた譯ぢやないんでせう。」毅はまた涙ぐむでくる俊子を抑へるやうに云つた。

「今夜の樣子でいづれとも決まるんですけど、もうどうせ駄目で御座いませうよ。それに私にしましてもこれ程覺悟を極めましたんですから、此の儘ずるずるにまたもとのやうになるんでは厭ですわ。」

「さうですとも。どうせもう其處まで事件が發展してしまつたものなら、いつそ一思ひに別れてしまう方が可いでせう。」毅は言葉の調子を張つて、「それに離

婚といふことは貴女の考へてゐるやうに不名譽なものぢやありませんよ。つまらない男に奴隷のやうに踏み躙られてゐるよりもいくら立派だか知れません。自分を理解し尊重して呉れないやうな良人はいづれの意味から云つても貴女方の敵です。一旦結婚といふやうな無意味な桎梏に縛りつけられたものはそのなかで十分爭ふ必要がある。そしてもしほんとに自覺したらその時こそきれいにその桎梏を破つてしまふばかりです。どうせ結婚した男と女の間には露骨な利害關係のほかには何にもありやしないのですからなあ。」

「ほんとにさうて御座いますとも。私も今度こそつくづく女といふものゝ位置を考へてみました。同じ人間でありながらいつも不利益な位置にばかし立たされて、その上こんな辱かしめを受けなければならないのかと思ひますと、ほんとに口惜くつて耐らないんで御座います。いくら女だつてそれぢや餘りぢや御座いますまいか。それに家庭を作りましたからつて、私共の方ではある丈けの犧牲は拂つて居りますんですから譬へ優待はされないまでも虐待される譯は御座いませんのですからねえ。」俊子は頰に血の氣を漲らせて、いつにな

く強い聲で云つた。その言葉は今まで長い間彼女の心の底に鬱積してゐたものと見えて、まるで紙を剝がすやうについついと唇から流れ出た。

毅は椅子の腕木へ肱を突きながら廣々とした空想の鄕國を瞻てゐるやうにうつとりした恰好をして口をきかなかつた。

俊子はそれから後まていろいろと良人から受けた迫害やら、男心の果敢なさやらを訴へてゐたが、そのうちにいつかまた涙脆いもとの調子に歸つて過ぎ去つた昔の話などをぽつぽつしはじめた。

更け靜まつた屋敷町にはいつかしら寂しい夜廻りの擊柝が遠く聞えだした。それを聞くと俊子は夢がさめたやうに椅子から起ちあがつてそこそこに歸り支度をした。

毅に送られて内玄關へ出た時、俊子はあれほど饒舌つて置きながらまだ云ひ殘したことがあるやうに思はれてふと式臺のところへ立つた。と、毅は何と思つたか、その顏をぢつと見て、

「餘り思ひ過ごさないやうになさい。體が大事だから。」と呟いた。その眼の

底には深い感情が輝いてはゐたが、俊子には何だかひどく物足りなかつた。いつも手紙に書いて寄越すやうな心持がほんとに毅の胸に潜んでゐるだらうか、――彼女は輕い失望を覺えながら眞闇な戸外へ出た。

母の心

俊子が杉浦家から程遠からぬ自分の實家へやつて來た時には母親はまだ津崎から歸つてゐなかつた。弟の喜三郎が奥の茶の間へ大きな餉臺を持つて來て、實習の白地圖を書きながらしよんぼり留守居をしてゐた。

俊子は大火鉢の向ふへ坐つて、今宵の差迫つた出來事を知つてか知らずにか妙に勞はるやうな人懷こい調子で話しかける喜三郎の言葉を、うつとり浮の空で聞いた。心のなかは今別れて來た毅のことで一杯になつてゐて、賴りにならぬその人の擧動を思ふと、時々堪らない程胸が迫つてきた。そして今最後の裁きをやつてゐる津崎のこともすつかり思ひ諦らめて、これから先の身のなりゆきを考へ決めようと思へば思ふほど焦々した焦悶しさだけが先へ立つて、心はますます取留もなく亂れていつた。そして肌馴ぬ寒い夜風に當り過ぎたせいか、鳥肌だつやうな惡寒が斷絶なしに體ぢうに襲ひかゝつて、何んだか坐つてゐるにさへ堪へられないやうな氣持ちがしてきた。

喜三郎は何を云ひかけても姉が張合ひのない返事ばかりするので、しまひには不氣嫌な顏をして默り込んでしまつた。そして近眼な眼を殊更に圖面へ近づけながらせつせとペンを運ばせはじめた。

俊子はそれから長いこと茫然してゐたが、そのうちに漸次と毅のことが明白に心に映つて來た。自分は果してあの毅のことを何う思つてゐるのだらう、ほんとに戀してゐるのかしら、こんな行詰めた疑問が一時に湧きあがつてきた。併し俊子にはそれに答へる力はまるでなかつた。戀しいと思へば戀しくないこともなかつたが、併し眞實彼のために全身を捧げることが出來るか何うかは彼女自身ですら疑問だつた。そんならこの儘運命に屈從して毅のことをすつかり思ひ捨てゝしまへるかと云ふと、それも彼女にとつてはひどく悲しかつた。いづれにせよ俊子には毅といふものがそれほどまでに自分に接近してゐるとは思へなかつた。二人の間にはまだ踰えられぬもう一つの溝があつた。

十一時うつと間もなく門の外てかすかに車の鈴の音が聞えた。思はず耳を澄ますと、やがて玄關の處で、

お歸りッ。」といふ寒さうな聲が聞えて、女中達がばたばた出迎へに立つ足音がした。

俊子は俄に胸騒ぎを覺えて同じやうに出迎へに立つたが、玄關へ通ふ開戸のところでぐらぐらと眩暈がしてきたので、その儘立ち竦んでゐると、母親は前屈みに顏を俯伏せながら引違へに入つて來た。

母親は俊子の姿をみるとはつとしたやうに顏をあげた。その顏は何うしたのか鉛のやうに眞蒼だつた。

「お歸り遊ばせ。さぞお寒かつたでせう。」と、俊子が勢のぬけた聲で力めて挨拶するのを聞き流して、母親はその儘奥へ通つて行つたが、後から引添つて來る俊子を待ち受けてやがて落膽したやうに大火鉢の前へがくりと腰を卸した。

そして喜三郎に向つて、

「お前氣の毒だけどちよつと此室を外してお呉れ。」と云つた。

喜三郎は何事が起つたのかと思つて眼をきよろきよろさせながらいつにない母親の變つた容子をみてゐたが、やがてしぶしぶ起上つて次の間へ入つて行

つた。

たつた二人きりになると母親は急に居坐ひを直して、底力のある低い聲で、

「俊子。」と云つた。そして暫らくの間言葉も出ないやうにまじまじ俊子の顏を睨みつけてゐたが、やがて險わしい眼に一杯涙を溢へて、

「お前も大變なことをして呉れたねえ。」

俊子はそれをきくと譯も分らずにぶるぶるつと體を慄はした。

二

母親は言葉に力を籠めて、

「どうも時之助さんが今度の話を持ち出した時の樣子が變だつたから、ひよつとしたら何か底に含んでゐることでもあるんぢやないかと思つてゐたが、矢張り私の考へ通りだつた。まさかお前に限つてそんな不身持があらう筈はないと思つてゐたもんだからつい放心してゐて、私やこんな恥かしい思ひをしたことは一生に初めてだ。」と云つて今度は詰問するやうな調子になりながら、「お前

も分別のある年をして何だつてこんな取返しのつかないことをして呉れたんだい。莫迦々々しいにも程があるぢやないか。私や何と云つてお父様のお位牌にお詫びをしていゝか、もう腹が立つて腹が立つて、昔ならお前を殺して私も一緒に自害してしまうんだけど……。」と恐ろしい興奮はさう云ふうちに母親の喉もとまで込み上げてきて、いつか呻りながら涙聲になつてしまつた。

俊子は母親の權幕が餘りに凄じいのでをどをどしながら顔を得上げなかつたが、氣を靜めて考へてみると、母親が何をさしてさうまで興奮してゐるのだかまるきり腑に落ちないのでやがて遠慮深い眼でそつと母親の顔をみあげながら、

「お母様。もう少し靜かに仰有つて下さいましな。私にや何のことですか薩張り分らないんで御座いますもの。」

「分らないことがあるもんですか。お前の胸に聞いて御覽。」母親は更に強い調子で云つて、白々しいと云ふやうに蔑んだ眼でぢつと見返した。

それを聞くと俊子は臆病らしく小首を傾げて、

「私の思ひ違へかも存じませんけど、そんなにまで仰有るやうな事を致した覺えは御座いませんわ。」

「それだからお前の心は腐つてゐるんです。何うしてそんな卑しい心になつてしまつたんだらうねえ。」母親は今更のやうにしみじみ云つて俊子の顔を見据ゑてゐたが、俊子がまだ腑に落ちないやうな眼つきをしてゐるので焦悶かしがりながら衝き動かすやうに、

「お前のやうなものには面と向つてかうと云つて聞かせなければ自分のしたことが分らないんだらう。一體お前は杉浦の毅さんと何んだつてあんな厭らしい手紙のやりとりをしてゐるんだい。これだけ云つたらさすがのお前だつて分るでせう。」

「まあ、毅さんの事なんですか。」俊子は餘りのことに呆れて云つたが、頰にはみるみる血の氣がさつと上つて來た。自分ではその儘笑つてしまひ度かつたのだが、妙に胸がわくわくして唇が固くなつてしまうので、

「あんなことは何でもないぢや御座いませんか。」と、漸う此れだけ云つた。

「何んでもない事があるもんですか。人の妻たるものがあんなことをして何でもなかつたら女の道は何處にあります。お前にやそれだけの理窟も分らないのかい。何の爲に今まで教育を受けて來たんです。」母の言葉は火のやうに燃えてきた。

俊子はそれを聞くとまたぐらぐらつと眩暈がして來て、思はず兩手で顏を掩つた。

三

かつと上血せた俊子の耳には勢ひに乘つて云ひ續ける母親の聲が夢のやうに聞えて來た。その聲はさまざまに結びついて、一々俊子の胸に思ひも懸けぬ恐ろしい出來事を響かせた。それを綜合してみると、俊子には今宵津崎家で起つた爭議の有樣が略分つてきた。

良人の時之助は彼女が家を出懸けてから後で、大切な彼女の手文庫を開けて端なくもその中に隱してあつた毅の手紙を發見した。彼は卑怯にもそれを母親や媒人の遠藤博士の前へ突出してすぐさま云ひ懸りの種に利用した。彼はずつと以前から毅と俊子との間に忌はしい關係があつたものと斷言して、口を極めて彼女の不貞を罵しつた。そして良人としては堪へ忍ぶことの出來ぬ侮辱を受けたと云つて、二人を相手に姦通の告訴をするとまで威嚇した。

併しその威嚇の裏には良人の卑しい計畫が露骨に見えてゐた。良人はそんな不貞な妻に對して義務を盡くす必要はないと云つて、今までの療養費、即ち彼女が病中に要した諸雜費をざつと千五百圓につもつて、それだけは當然實家の松倉家から支出すべきものだといふやうな口占を洩した。表面は療養費であつても、その實は卑しい手切金だつた。つまり此場合さして意味もない毅の手紙が意味もない千五百圓で購はれなければならなかつたのである。

併し時之助の平常をよく知らない母親は決してさうは解さなかつた。彼が今迄毅と俊子との間の關係を薄々氣づいてゐながら名譽の爲めに隱忍してゐたのは立派な紳士的な態度だと思つた。そして飽まで俊子の不貞を疑つてゐる母親には、時之助が放蕩をするのも、家を外にして出歩いてゐるのも皆その爲

だと思つた。それで總ての事がさらりと讀めたやうな氣さへした。そしてさうなると今まで自分を欺いてゐた俊子が反對に此上もなく憎くなつて來るのであつた。

母親は散々俊子を云ひ罵しつてしまうと、やがて又急に涙含んできて、

「お母さんはもうすつかり決心をきめてしまひました。お前のやうなものがゐては時之助さんも將來さぞお困りだらうから、今夜遠藤さんもお立會ひの上、てきつぱり離緣をして貰うことに決めてしまひました。その千五百圓のお金も今更恥かしくつて叔父様方に御相談も出來やしないから、私が一存でお父様から頂いた遺産のなかから出すことにしました。」と俊子の胸を針で刺すやうに云つて、耐力もなく涙聲になりながら、「さうしてお前もこんな事を仕出來した上はもう一切親子の緣を切つて貰ひます。お前にも相當な覺悟はあるだらうから此れから先は何うなりとお前の勝手にするが可い。」

俊子は頻りに嗚咽しながら默つて母親の言葉を聞いてゐたが、茲まで來ると急に耐らなくなつて、

「お母様。そりや餘りて御座います。餘りて御座います。」と泣き聲で云つて、「いくら私が莫迦でもそんな、そんな道に外れたことは致しやしません。私だつて妻としての務ぐらゐはようく存じて居ります。そりや全く良人の云ひ懸りなんて御座います。有りもしないことを云つて私を苛めようとするんて御座います。」

四

「そんな立派な口をおきゝなら、何故辯解が出來ないんだい。後暗いことさへなけりや自分の身の明りの立つやうにちやんと事を分けて辯解すりやいゝぢやないか。それが出來ないうちはお前が幾ら何と云つたつて駄目です。」母親は少し調子を和らげて辯解して欲しさうに云つた。

「だつてそんな事は辯解する迄もないぢや御座いませんか。毅さんと私とは今日や昨日の間柄では御座いませんし、もう子供のときから始終行き來してゐるんですから、お母様だつて大抵お分りになりさうなもんぢや御座いません

か。それにお母様までそんなことを信じて被居るのが私には口惜しいんて御座います。」俊子も涙を拭いて静かな聲に歸つたが、やがて反抗するやうな調子になつて、「假しまた若し私と毅さんとの間にそんな變な關係があるとしても、それを時之助からいざこざ云はれる譯はないと思ひます。良人にはそんな資格は御座いません。自分は外へ出ちや勝手に賤しい藝者なんかと關係して歩いてゐながら何うしてそんな立派な口がきけませう。餘り人を馬鹿にしてゐるぢや御座いませんか。それにお金の話だつて私にはまるきり譯が分りません。矢鱈と家を外にして出歩いたり、藝者を連れて遠方へ行つたりしてゐながら、私が病氣で費つたお金が何んだつてそんなに惜しいんて御座いませう。しかもその病氣も原因を申せば良人の爲めなんて御座いますもの……。」俊子の胸には先刻毅の吹き込んだ強い言葉が甦つて來たので、調子は自然と激越になつてきた。

母親は呆れたやうな顔をして聞いてゐたが、やがて聞くに耐へないといふやうに眉を顰めて、

「お默んなさい。云はせて置けば何んとても云ふ。何うしてさうまで心が腐つてしまつたんだらうねえ。」と、また怒りに燃えながら、「そんな氣てゐるからお前はどんな惡いことをしても平氣てゐられるんてす。お父様が御覽になつたら何と仰有るだらう。お前みたやうなものはいつそ告訴てもされて牢屋へても入つたら眼が覺めるかも知れない。」

「そりや良人は男てすからやりやう一つては私を罪人にても何てもしてしまうことが出來ますてせう。ても私はもう負けては居りません。爭ふ處まて爭ひます。散々踏つけられたあとて、ありもしない惡名まて附けられて何うして我慢して居られませう。お父様だつてきつと私の方が正當と思召すに違ひ御座いません。」俊子は自分て云つてゐる言葉の鋭さに驚きながら勢ひに乘つて喋舌り續けてゐたが、漸次と何を云つてゐるのだか分らなくなつて來て、「毅さんと手紙のやり取り位したのが何んてせう。あんな手紙て人を疑ぐるなら、疑る人の方が心が腐つてゐるんてす。自分が始終さう云ふことばかりしてゐるから、人も矢張しさうだらうと疑るんて御座います。」さう云ふうちに俊子

の聲は漸次と消え入るやうに細くなつて行つた。

五

俊子は猶ほも低い聲で言葉を續けて、

「私は津崎の妻にはなりましたけど、心まであの人にすつかり遣つてしまつた譯では御座いません。私にだつて自由は御座います。心のなかで何んなことを考へてゐたつて、あの人がそれを干渉する權利は御座いません、若しそれが厭なら何故私の心まで自分のものにするやうな手段を執らないんで御座いませう。私共は纖弱い女で御座いますから、良人が私共に對して盡くして呉れることを盡くしてくれさへすれば、いつでも良人のものになります。それに良人はまるで私を女中かなんぞのやうに思つてゐて、ちつとも私の事なんか考へて呉れないんです。それですから私だつて反抗しずにはゐられません。私もかうなつた上はもう何處までも爭ひます。自分の心が良人に分るまでは何んな事があつても動きません。」俊子は毅の口吻をすつかり出して、

歇斯的利的に顔ぢうの筋肉を動かしながら云つた。

「お默んなさいと云ふのに。」母親はかつとしたやうに思はず聲を荒らげて、「もう其處まで聞けば澤山です。つべこべ理窟を云ふことばかり知つてゐて、そんな事は自分の體が潔白だといふ證明がたつてから云ふもんです。もうお前みたやうなものには口で云つて聞かせたつて分らないんだから、私はもう一言も云ひません。」と、涙聲で云つてその儘ついと起ち上つた。そして涙の一杯溜つた眼で憎さげに俊子の横顔を睨みながら、

「そのかはりもう今後は家へ歸つて來てお呉れでない。何處へでもお前の好きな處へ行つて、勝手なことをして暮らすがいゝ。このお父樣のお家にはお前みたやうなものを置いとく事は出來ません。」と、絶望したやうな暗い語調で云つて、母親は居間にしてゐる奥の六疊の方へすらすら歩いて行つたが、そこの唐襖をあけるとその裏で立ち聞きてもしてゐたと見えて、喜三郎が慌てゝさつと飛び退いた。母親は吃驚してそつちへきつと眼を据ゑたが、やがてその儘なかへ入つて後の唐襖をぱたりと閉めてしまつた。そしてなかでごそごそ足音を

たてゝゐたが、今度は喜三郎を連れて更に奥まつた離座敷の方へ出て行つたらしかつた。

俊子は明かるい座敷のなかへたつた獨り取殘されると、急に胸が込みあげてきて、激しく啜り泣きしはじめた。何う考へなほしても母親からそんなにまで云はれる理由はないので、餘りに思ひ遣りのないその仕打ちがひどく腹立たしくなつてきた。その儘母親の後を追つて行つて、得心のいくやうに心の底にあることをすつかり打破つて話してしまはうと思つたが、さう思つて起ち上がる刹那、また激しい眩暈が頭を壓し潰すやうに襲ひかゝつてきて、眼の前が眞暗になつてしまつた。そして譯もない腹立たしさばかりが無上に胸へ突きあげて、息も吐けないほど胸の血が躍るので、彼女は何うでもなれといふやうな捨て鉢な氣になりながらやがてふらふら茶の間から玄關の方へ出て行つた。そして有り合ふ下駄を突つ懸けて眞暗な戸外へ飛び出してしまつた。

六

もう十二時も過ぎた頃とみえて、邸内は人の氣勢もないやうにしんしんと夜が更け渡つてゐた。寒い風の吹き滿ちた空には寂しい片破れ月がしよんぼり殘つて、何處か遠くの方でかすかに犬の遠吠えが聞えてゐる。

俊子は冷たい夜氣に面を打たれると、熬りつくやうな更に強い興奮を覺えて、何を考へる餘裕もなく長屋門の軒下へ近寄つた。そして潜りの小門をあけて往來へ出ようとすると生憎にももう錠が下りてゐるので、今度は自棄になりながら力にも及ばぬ門をごとごと突き動かしはじめた。と、その時今出て來た玄關の戸がまた開いて、そこから誰かゞ慌てゝ驅け出して來た。そして黒い人影はそこらをうろうろしてゐたが、門の蔭の暗闇で門の音を聞きつけると突如走り寄つて來て、

「姉さん。姉さん。」と、おろおろ聲で呼びかけた。それは喜三郎だつた。

俊子は胸が塞まつて返事が出來なかつた。

「姉さん、今頃になつて何處へ行くんですよう。」喜三郎は俊子の身近かに歩み寄つて來て彼女の袂をしつかり握り緊めながら又泣き聲をたてゝ云つた。

「何處へ行つたつて可いぢやないの。私は、私はもうこんな家へは歸つて來ないの……。」俊子は吶りながら漸うこれだけ云つたが、あとは涙に遮られて言葉が出て來なかつた。

「そんな馬鹿なことを云ひ出しちや僕が困つちまうぢやありませんか。母樣と云ひ合ひをしたつて、あんな事は何でもありやしないんです。母樣は今僕に姉さんを追駈けて行つて連れておいでつて云つたんだもの。だからそんなことを云はないでお願ひですから家へ歸つて下さいな。ねえ、姉さん。」と、喜三郎は姉を無理にも引立てるやうに袂を強く引いた。

俊子はそれを素氣なく振り切つて、

「姉さんにはもう家はないんです。」と呟いたが、我れながらその言葉の情なさにつまされて、到頭しくしく聲を立てゝ欷りあげだした。

氣の弱い喜三郎は貰ひ泣きをしてその儘口を噤んでしまつたが、やがて思ひ

迫つた聲でいろいろと姉を慰めて、やつとのことで彼女を家のなかまで連れ歸つた。そして母親の思惑を推量つて態と茶の間へはいかずに、離座敷へ通ふ廊下の傍にある自分の勉强部屋へ連れていつた。

俊子はそこへ入ると突然壁際にぐつたりくづをれて、顏を見られるのが恥かしさうに電燈の光には脊なかを向けながら頻りに啜り泣きをしてゐた。喜三郎は机の前へ坐つたなりて、時々涙ぐむだ眼で姉の樣を偸み見てゐたが、到頭何とも口をきかなかつた。

その晩、俊子は結婚してから初めて喜三郎と臥床を並べて寢た。子供の時代に他愛もない寢物語りに耽りながら仲よく寢た室で、丁度その時と同じやうな恰好をして寢た。併し俊子はいつに變らぬ安らかな弟の寢息を聞いてゐながら何うしても眠れなかつた。何うかして氣を靜めて眠らうとすればする程眼が冴えて、突き詰めた悲しい考へばかりが續々と胸に責めかけて來た。そして時々歯の根も合はないやうな惡感と一緒に氣味の惡い冷汗が脊筋に滲み出て、顏だけが燃えるやうにかつかと熱つてきた。彼女は自分でもひどく發熱して

來たことに氣づいてゐた。

その翌朝、結びもあへぬ寢苦しい夢からさめると、俊子は體ぢうに何とも云へぬ激しい苦痛を覺えた。盜汗をかいたものと見えて腋の下から脊なかへかけて氣味惡く冷やついて、節々の氣怠るさと一緒に頭が破れるやうに痛んだ。又先頃の病氣がぶり返したのではないかと思ふと彼女は何よりも先に疼くやうな不安を覺えた。

喜三郎は餘り姉が苦しさうにしてゐるので學校の制服を着けてしまうとそつと枕許へ歩み寄つて、

「姉さん、何うかしたの？」と、優しく訊ねた。

俊子は昨夜のことがあるので態と夜着の襟へ顏を隱しながら、

「頭痛がしてしやうがないからもう少し寢ましといて頂戴。」と、消え入るやうな聲で答へた。と、喜三郎は急に心配らしい顏になつて、

「そりや可けない。昨夜餘り夜風に當り過ぎたからきつと感冒をひいたんで

すよ。」と云ひながらそつと手を差延べて姉の額に觸つてみたが、柔かい肌が火のやうに燃えてゐるのをみると、今度は急に慌てだして、

「こりや大變な熱だ。放置つといちや駄目です。これから直ぐに大瀧さんに來て診て貰はなけりや……。」と云ひ捨てゝばたばた茶の間の方へ驅出て行つた。

暫らくの間母親のところへでも行つて姉の容體を告げてゞもゐたものと見えて音沙汰がなかつたが、やがて悄氣返つた顏色をしながら歸つて來て、

「ほんとに母樣には困つちまうなあ。朝つぱらから泣いたり怒つたりしてゐて、僕ひとりで何うすることも出來やしない。こんなぢや僕は學校へなんか行つてられやしないや。」と、途方に暮れたやうな聲を出して云つた。そしてその儘敷き放した自分の臥床の傍に横坐りに坐つて、折角着けた制服をまたしぶしぶ脫ぎだした。

俊子は臥床のなかゝら喜三郎の樣子に聽き耳を立てゝゐたが、その悄れた聲を聞くと急に弟が可哀想になつてきた。昨夜から自分と母親との間に立つて何んなに心配したらう、親身なものといつては親子たつた三人きりであるだけ

に彼の小さな心は今度のことでどんなに慴え戦いたらう。かう思ふと俊子は猶一層氣の毒になつてきて、何とか云つて慰めてやり度いとは思つたが、生憎その言葉が胸に浮んで來なかつた。

喜三郎は久留米絣の筒袖に着換てしまうとその儘ぼんやり何を考へるのか打沈んでゐたが、やがてまた姉の枕許へ寄つて來て思ひ入つた調子で、

「ねえ姉さん。姉さんはほんとに又家へ歸つて來るんですか？」と訊いた。

俊子はちよつと返事に困つたので口籠りながら、

「まだよく分らないの。だけどそんな事を心配するもんぢやなくつてよ。」

「そんなに隱さないだつて宜う御座んすよ。僕はちやんと知つてるんだもの。」と、喜三郎は獨りて呑込んでゐるやうな顏をして、こましやくれた口調になりながら、「母樣は姉さんが何か惡い事をしたやうに云ふけど、僕はそんな事は決してないと思ふんです。僕はもう初めつから津崎の義兄さんは嫌ひだつたの。こないだ叔父さんに聞いたんだけど、義兄さんこそ何か惡いことをして新聞に出されたんぢやありませんか。新聞なんかに出される人間に碌な者はゐやしな

い。」

さう云ふ途端に來客てもあるのか玄關の方から消魂しい呼鈴の音が聞えて來た。喜三郎はそれを聞くとふいに話を斷つて、

「きつと大瀧さんの先生だ。」と云ひながら玄關の方へ飛び出していつた。

二

ものゝ十分も經つか經たぬ間に喜三郎は今度は何かにひどく驚かされたやうな眞蒼な顏になつて歸つて來た。室へ入ると突如息を彈ませながら、

「姉さん。大變ですよ、大變ですよ。」と重ねて叫んだ。

俊子はそれを聞くとびくりとして、思はず枕から顏を擡げながら、

「まあ、何んですよ！大瀧先生ぢやないの。」と慌てゝ云つた。

「うゝん、さうぢやない、辯護士が來たんですよ、辯護士が。」と一息に云つて息を呑み込みながら、「津崎の代理だと云つてね、原田つて云ふ名刺を持つた辯護士が來たんです。頭髪を分けた脊の低いそりや厭な奴なの。」

「まあ、あの原田が？」と俊子は吃驚したやうに云つたが、その言葉と一緒に彼女の胸にはその男の姿貌がくつきりと浮んで來た。原田といふのは良人の銀行で使つてゐる辯護士で、津崎の家へも始終出入りしてゐた男であつた。そして銀行でも公だつた訴訟などには顔を出さずにいつも陰へ計り廻されてそれよりも更に難かしい事件の處理をやつてゐる男で、さすがの良人も彼奴は善くない奴だと折に觸れては云つてゐた。妙に人に取入ることの上手な、頭の低い男で、見るから惡辣さうだつた。

俊子は金縁眼鏡のまはりに小皺を一杯寄せて齒莖まで出して笑ふ原田の顔を思ひ出すと、昨夜良人が母親に云ひ出した無法な要求がそれとなく浮んで來て、急に恐ろしい不安に襲はれた。何しに原田が此家へやつて來たかといふことはもう聞かぬ先から彼女にはよく分つてゐた。良人がそれ程までに惡辣な手段を執らうとは夢にも思ひ懸けなかつた彼女は、眼の前が俄に眞暗になつたやうで、居ても立つても堪まらないやうな心持ちにならずにはゐられなかつた。

「それで母様は原田にお逢ひなすつたの？」暫らくしてから俊子は慴えたやう

な眼つきをしながら訊いた。

「え、今奥の十疊で何かごとごと話し合つてゐるんです。僕は今まで椽側の處でそつと立ち聞きしたんだけど、聲が低いんでちつとも聞えないんだもの。」

俊子はそれつきり眼を据ゑて口をきかなかつた。重苦しい熱の惱みと不安とが交るがはるに彼女の胸へ壓し迫つて、寢返りを打つてさへ頭の心が針で衝き刺されるやうにづきりづきりと痛んだ。そして此れからさきが何うなるものかと思ふと、膨れぼつたい彼女の眼には熱い涙が譯もなく湧きあがつて來た。

ふとその時、茶の間の隣りにある電話の鈴が鳴つて、お初の聲が何處へかけるのか頻りに番號を呼びだしてゐるのが微かに聞えてきた。耳を留めて聞くと、それは麻布の叔父へかけてゐるのであつた。叔父の家には電話がないので、そこへかけるには三四丁も離れた酒屋から取次いで貰はなければならなかつた。それ故餘程の急用でゞもなければ滅多にかけなかつた。

「姉さん。あの電話の容子ぢや叔父さんも來るんですね。」喜三郎は電話がきれるとまた心配さうな顔になりながら呟いた。

俊子は死んだやうに眼を瞑つて何とも返事をしなかつた。

三

大瀧醫學士は九時頃になつて漸とやつて來た。額の禿げあがつた赭顔に愛想のいゝ微笑みを浮べながら婆やのお藤に導かれて室へ入つてくると、例の程のよい聲で、

「やあ、奥さん暫らくでした。」と挨拶してつかつかと俊子の枕許へ來て坐つた。そして丸々と肥つた洋服の膝を窮屈さうにもぢもぢさせながら、

「何時から此方へ？」と、訊いた。

「俊子は半ば枕のうへゝ起きなほりながら苦しさうな笑顔になつて、

「昨夜鳥渡遊びに參りましてその儘急に熱が出ましたものですから……。」

「はゝゝゝ。何んの彼んのと云つてはお母さんの乳を呑みにおいでなさるな。まだお實家の方が時々は戀しくなると見えますな。」子供の時から懸りつけになつてゐるので大瀧はこんな笑談口もきく程俊子とは懇意だつた。

「あら、先生……。」俊子は何か云ひ返さうとしたが激しく眩暈がするのでその儘俯伏してしまつた。

大瀧はその容子をみると急に眞顔になつて、

「大分お苦しさうですな。一つ拜見しませうか。」と云ひながら俊子の臥床へ居坐り寄つて物馴れた調子で診察をしはじめた。

大瀧は脈を執つたり、聽診器を胸に當てたりしたあとで、小首を傾けながら暫らくの間考へ込んでゐた。

俊子は他からも見えるほど激しく波打つ胸を披けた儘その顔をまじまじ瞻めてゐたが、やがて不安に堪へないやうな聲で、

「先生。又先の病氣が再發したんぢや御座いますまいか？」と、をづをづ訊いた。

「いや、そんなことは有りません。」大瀧はきつぱり答へたが、又曖昧な調子になつて、「何うも今の所ではちよつと診斷がつかんですが、まあ大した事ぢやありますまい。併し此頃は大分方々で肺炎が流行つてゐるから、餘程注意せんと可かんですよ。」

俊子の胸には肺炎といふ言葉と一緒にその恐ろしい疾病で、たつた三日ばかりの間にぽつくり亡なつてしまつた昔の友達のことが浮んで來た。危篤と云ふ思ひがけない報知で驅けつけた時には、ついその四五日前まで學友會の相談で笑つたり怒つたりしてゐた氣のさくいその友達がもう上釣つた瞳を空にさまよはせて、斷末魔の忙しい息をぜいぜい喉へ引いてゐた。その時から俊子には肺炎といふ病名が黑い陰影のやうになつて胸の底深く刻み込まれてゐたのであつた。

大瀧はみるみる眞蒼に變つてゆく俊子の顏をみると、急に言葉の調子を賑やかにして、いろいろと云ひ慰めた。そして重ねがさね安靜にしてゐなければならぬことや、服藥の方法などを說いて聞かせたあとで、晩方に今一度廻診をする約束をして病間を出て行つた。

大瀧を送り出しにいつたお藤や、喜三郎が再び歸つて來ると、間內には妙に冷たい不安の影が射して來た。皆口を噤んで傷ましさうに俊子の顏を偸み見た。それと氣づくと俊子は自分の病氣の容體が或危險に近づきつゝあるのを感じ

て、何とも云へぬ絕望に胸を壓し潰された。

お藤はやがて甲斐々々しく起ち上つて日當りのいゝ離座敷に病間を移す支度をしはじめた。俊子は喜三郎の肩に縋りながら、ふらふら、椽端へ出て、冷たい日射しに照された渡り廊下を離座敷の方へ連れてゆかれた。その時、彼女の過敏になつた耳には奧座敷でごとごと話し合つてゐる人々の話聲がきれぎれに聞えて來た。そのなかにはいつの間にやつて來たのか麻布の叔父の尖つた聲も交つてゐた。

四

それから長いこと俊子は新しい敷布をしいた夜着のなかへすつぽり包まつて、眼を睜けたり瞑つたりしながら激しい惡寒に慄へてゐた。何よりもさきに死の恐れが彼女の心を冷たくして、眼をあけてぢつとみてゐると、そこらが漸次と眞暗になつてゆくやうに思はれた。そしてその薄明りのなかに肺炎で死んだ友達の死顏が蒼ざめた夢のやうに隱現して、それがいつか自分の顏に似てき

さへもした。俊子は幾度となく寝返りをうつて、襲ひかゝつてくる戦慄を押し堪へた。

喜三郎はぢつと落着いて坐つてゐられないやうに始終出たり入つたりそわそわしてゐたが、姉の苦悶が漸次と募つてゆくので到頭見兼ねてしまひには茶の間の方へ行たつきり歸つて來なかつた。と、夫と引違へに廊下の方で重々しい足音が聞えて、やがて離座敷の入口の處から、

「やあ、俊子。お前は加減が悪いさうだな。」と云ひながら叔父が興奮しきつた顔色をして入つて來た。

俊子はその聲を聞くと急に我れに返つて勢ひづきながら頭を夜着のなかから擡げた。

「あゝ、もう起きんでも可い。その儘にして居なさい。その儘に。」と、叔父は上から抑へるやうな恰好をして、自分から枕許へ廻つて小火鉢の傍へ座を占めた。そして蒼ざめた俊子の顔を覗き込みながら、

「大分顔色も宜くないな。今大瀧さんが見えとつたやうだが、何う云ふお診斷だつたかな。」と心配さうに聞いた。

俊子は頭を擡げてゐる苦しさに堪へ兼ねてまたもとのやうにがくりと枕の上へくづをれながら、

「は、大した事でもないさうですが、此頃は肺炎が流行るさうで御座いますから用心しないと可けないつて云ふお話して御座いました。」

「さうか、そりや可かん。今そんな大病にでもなつて呉れたら何うすることも出來やしない。お前も今度のことぢやいろいろ心配せにやならんこともあるだらうが、私がかうしてゐる間は決してお前の悪いやうには取計らはんから、安心して養生するが宜い。何と云つても體が一番大切だからなあ。」

叔父は親しみの深いしんみりした調子で云つて、俊子の顔をもう一度眞面に見た。

俊子はかうして叔父から親切な言葉を懸けられゝば懸けられるほど頼りない果敢なさを覺えて、感謝の言葉も唇までは出て來なかつた。唯熱い涙ばかりが云ひ甲斐もなく頬に傳つて、今にも嗚咽が胸先から込みあげて來さうにな

つた。

叔父はその樣をぢつと瞻もつてゐたが、到頭堪へ切れなくなつたと見えて、

「そんなに思ひ詰めんでも可いぢやないか。萬事私がすつかり呑込んで居るのだから、私を賴りにしてもう少し氣を廣く持つて居つて呉れんけりや困るぢやないか。」と勢ひづけるやうな調子で云つて、その儘考へ深い眼つきになりながら、

「お母さんはあゝ云ふ人だから何んでも總て一途に自分の考へで解釋してしまふけれども、私は決してそれには賛成せん。私は飽までお前を信じてゐる。お前に限つてお母さんの疑つてゐるやうな事は決してありやせん。そんなことを疑ふのさへ私にはどうしても譯が分らんのだ。」漸次と興奮してきながら叔父は話を今朝の出來事の方へ進めて行つた。

五

「お前も薄々知つとるだらうが、實は今朝津崎から辯護士を差向けて寄越したんだ。私は昨夜のことをちつとも知らんものだから、何が何やら薩張り分らんで驅けつけてみたが、よく譯を聞いてみると果して私が此間から危ぶんでゐた通りだつた。あゝやつて愚圖々々しとつたらきつとこんな事になるだらうとは思つとつたが、併し津崎がこれ程までに激烈な手段を執らうとは私も思はなかつた。人もあらうに自分の妻の實家へ辯護士を使つて怒鳴り込ませるなぞとは實に以て怪しからん話だ。少くとも我々の社會では聞いたことのない話だ。かうなつた以上は斷じて許すことは出來ん。此方でも相當な手段を執つて爭ふところまで爭はんけりや何處まで附け上るか分りやせん。人間と思つて相手になつとつちや限りがないのだからなあ。」と叔父はぷんぷんしながら云つて、話を後へ戻して今朝のいちまきを順序をつけて語り出した。

良人はいつぞや叔父の云つてゐた通り何等かの形式で銀行に對して信用を失するやうな惡い事を仕出來してゐたのであつた。固よりその事實はまだ明確に知ることは出來なかつたが、叔父の探つた範圍では立派な法律上の罪を犯して公の金を引出して費消したことだけは分つてゐた。そして今度の大阪

行きも實はその穴埋をする金策のためらしく、それが失敗に終つたことも前後の事情に照して略想像がついた。それに金高から云つても可成りの大金らしく、遊蕩のために浪費したものとしては餘りに嵩が上り過ぎてゐるので、その大部分は兜町で相場の塵になつてしまつたことも叔父には自然想像がついた。そして年末にも間近い今日此頃なので、一日も早くかたをつけなければ彼には恐ろしい破滅が來る處から苦悶の極、さまざまな良からぬ謀計を廻らしてゐるのであつた。

良人が俊子の母親に向つて云ひ出した千五百圓も全く良人の罪惡を社會公衆の眼から掩ひ隱くす遮蔽物の一部に利用される筈なのであつた。それを母親が案外輕く引受けたので、良人は好機乘ず可しと見て到頭辯護士を使つて松倉家を恐喝にかゝつたのであつた。辯護士は叔父の前で姦通のことを云ひ出して、證據がかくまで歴然たる上は直ぐにも起訴すると云つて先づ叔父を散々に威嚇した。そのあとで極めて巧な辯口で示談の件に移つて、前後は自然と金の話に到達するやうにそれとなく話を進めていつた。

母親は何よりも家名の傷つくのを恐れて、先方の條件を一も二もなく承認しようとした。叔父はその腑甲斐なさを怒つて、さまざまに云ひ爭つた揚句、兎に角遠藤にも相談したうへ此方でも相當な代理人をたて、談判に應ずることにして一先辯護士を歸さうとした。代理人などと云ふと事が面倒になるので、原田は何うにかして母親だけに云ひ懸りをつけようと企んだが、叔父は最後まで頑强に云ひ張つて、斷乎としてその申出を撥ねつけた。そして原田が立ちしなに到頭生地を現はして、

「兎に角、最後の權利は此方にあるんですし、それに書類ももう全部出來上つてゐますので、向後は津崎さんの方の意志次第で明日にも告訴するやうになるかも知れませんから、それは豫め御承知を願ひ置きます。私の方では成る可く好意をもつて雙方の利益になるやうに妥協したいと思つてゐたんですが、此方のお考へがさうならもう此上御相談する餘地も御座いますまい。甚だお氣の毒では御座いますが、此後何ういふ場合に立至りましても何卒惡からずお含みを。」と云つてしれじれつくり笑ひをしながら母親の方をぢろりと見据ゑた

時、叔父は傲然として、その言葉を受けて、
「宜しい。いつなりと告訴なさい。若しこんな事で犯罪が成り立つなら私はいつでも俊子を法廷へ立たせる。天下公道のためだ。そんな馬鹿げたことで彼女を罪に陥せるものなら、それこそ天下の細君は悉く告發されなけりやならんことになる。」と怒鳴りつけてやつたといつて叔父は得意さうな顔になつた。

六

「でも叔父様。あんな津崎のことですから眞箇に告訴を致しやしますまいか。若しそんな事にでもなりましたら、私、何う致しませう。」俊子は叔父の言葉も耳に入らないやうにおろおろ聲で云つた。
「なあに大丈夫さ。いくら告訴をしたつて理由のないものを受理する筈がないぢやないか。そんな詰まらん事を心配するもんぢやない。」
「でもあんな無法な人ですから、どんな事を云ひたてゝ、私共を酷い目に逢はせるか分りや致しませんもの。それに私ひとりならよう御座いますけど、毅さんにまで御迷惑を懸けて、若し眞箇にそんなことにでもなりましたら、私どうして此れから先世間へ顔向けが出來ませう。」
「そんな馬鹿な事を氣にかけるもんぢやない。何んな事を云ひこしらへて訴へた處が、此方さへ疚ましい所がなけりやびくともすることはありやせんぢやないか。」叔父は唇だけで笑つて、「なあに津崎だつてそれ程の腹はないさ。此方が筋のいゝ家柄で、それに女ばかりだから馬鹿にしてかゝつてゐるのだ。かう云つて威嚇したら先方の云ひなりに金を出すだらう位なことで、お母さんやお前を愚弄して懸かつとるんだ。だから此方で餘り名譽を恐れてびくびくして見せたら、それこそ彼方の手に乘せられてしまふんだ。こゝは十分ひとつ腹を緊めて、何を云つて來ようが平氣で受付けんやうにしてゐなけりや可かんのだ。」
「でも……。」俊子はまだ不安らしく眼を据ゑて、「良人ひとりなら宜しう御座いますけど、あの原田が附いて居りましちやあねえ。彼の男はほんとの惡黨なん

で御座いますもの。」

「いくら悪黨だつてちつとも恐れる事は要らんさ。毒を以て毒を制すて、彼方から悪辣な手段を弄して來れば、此方でも悪辣な手段でそれを迎へるまでさ。法律といふものが行はれてゐる限り正々堂々と何處までも爭へる所まで爭はんけりや此方の云ひ分が立たん。」叔父は俊子を勵ますやうに力強い語調で云ひながら俊子の横顔をぢつと瞻つてゐたが、やがて笑談らしい笑ひ顔になつて、

「それとも何かね、お前の方には津崎と爭へん弱點でもあるのかね。譬へば母さんが疑つてゐられるやうな忌はしい事實が多少でもあつたと云ふのかね。」

「いゝえ、そんな事は決して御座いませんけど　。」と、俊子は慌てゝ云ひ消したが、何故かその咄嗟についと顔を背けて、耳の附根まで眞紅になりながら深い溜息を洩らした。

叔父は氣にも懸けてゐないやうに猶も笑ひ續けながら、

「一體よく考へてみると津崎も變な男ぢやないか。云ひ懸りをつけるのなら何か別な事でつければ可いのに、自分から好きこのんで妻の姦通呼はりをする

なぞは餘り莫迦氣た話ぢやないか。そんな事をすりゃ却て自分の估券を下げてしまふばかりだ、何ひとつ益する所はありやせん。それに今更お前が姦通をしたといつて云ひ觸らして歩いた時に、誰れがそれを眞に受けるもんぢやない。そこに氣が付かんといふのは彼の男にも似合はん愚な話ぢやないか。」と云ひながら同意を得ようとするやうに俊子の顔を覗き込んだが、彼女がまた涙含みながら悪寒のためにぶるぶる身を慄はしてゐるのを見ると、急にもの柔らかな聲に復つて、

「兎に角、こんどの事件は一切私が引受けて處置するからお前は安心して養生するがいゝ。今無理をして取り返しのつかんやうな重態にでもなつてしまつたらそれこそ大變だからなあ。」としみじみ云ひ添へた。

枕許の障子にはいつのまに高くなつたのか弱々しい初冬の日射しが一面に射し渡つて、軒先へ來て囀る雀の聲も朗らかな空の色を匂はせてゐるやうだつた。叔父はそれから長い間いろいろに俊子を慰めてゐたがそのうち喜三郎が呼びに來たので名殘惜しさうな顔をして立つていつた。

午後になると俊子の容體は益々險惡になつていつた。惡寒の上に輕い咳嗽さへ添はつて、咳をする度に茶褐色の薄い痰が少しづつ出て來た。そして胸の處に切ない痛みを感ずるので、彼女は斷絶なしに右左へ寢返りばかり打つてゐた。

夕暮れに大瀧がもう一度診察に來て見れた時には俊子は四十度以上の大熱のために、半ば精神が朦朧としてゐた。何を云つても苦しい、苦しいと喘ぐばかりで、時々は子供のやうに聲をあげてしくしく啜り泣きをした。大瀧は一應診てしまふと容易ならぬ顏色をして、お藤に命じて奥の間にゐる母親を呼ばせた。

母親は二十分ばかり經つてやつと喜三郎を連れて病間へやつて來たが、一眼俊子の病み呆けた姿をみると度を失つたやうな顏をして突如つかつかと枕許へ近づいた。昨夜の云爭ひがあつてから母親は初めて俊子と顏を合はせるので、内々氣拙い豫期を持つてやつて來たのであつたが、病氣とは云へ此れ程まで

の重態ではあるまいと思つてゐたので、急に慌たゞしい聲になりながら、

「先生、一體何うしたと云ふんで御座いませう。何の病氣なんて御座いませう。」と立て續けに訊いた。

「いや、立派な肺炎です。今朝拜見した時には此れ程容體が進まうとは思つてゐませんでしたが、何うも實に激烈に來たもんだ。」と、大瀧は俊子に聞えないやうに小聲で云つた。

「肺炎！」母親は電氣にでも打たれたやうに眼を据ゑながら「そりや大變です。かうして置いちや可けますまい。早速入院を。」

「いや、かう進んぢやもう迚も動かせやしません。今少しでも動かしたらそれこそ大變です。」

「まあ、そんな容體で。」母親はをどをどしながら云つて、大瀧の側へ居坐り寄りながら、「心配になるやうな事は御座いませんでせうか？ひよつとして萬一のことで御座いますと　。」

「靜かになすつて下さいまし。そんなにお騷ぎになるのが一番御病人の爲め

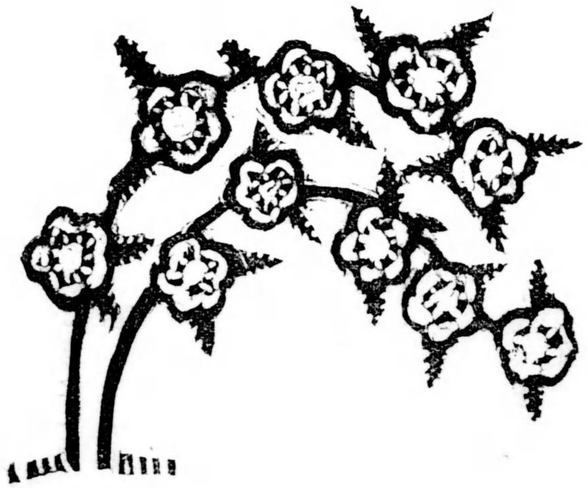
には良くないんですから。」大瀧は醫師らしい威嚴を示しながら、「なにしろ先頃の御病氣以來、まだ眞箇に健康にはなつてゐられないのですし、それに取分け心臟がお弱い方なのですから、今の場合何とも申上げられませんが、併しこの肺炎といふ奴はうまく分利さへすればさう心配することは要らんのですが……。」と、氣休めらしい事を云つて、「兎に角急いで手當をせんと、手遲れになつちや大變ですから。」と、急にそわそわしだした。

それから大瀧の名で看護婦會へ電話はかけられる、使ひは藥劑師の許へ走る。それ氷嚢それ罨法と、今迄妙に鳴りを靜めてゐた家のなかはまるで戰のやうに一時に沸き立つて來た。お藤もお初も上釣つたやうな眼眸をして鼻の頭に汗を滲ませながら廊下をうろうろしてゐた。なかでも喜三郎は姉の重態を聞くともうすつかり絶望して、薄寒い廊下の隅に突立つた儘、しくしく泣いてゐた。

看護婦が駈つけて來た頃には騷ぎも一しきり靜まつて、今度は何とも名狀することの出來ぬ不安な沈默が松倉一家を引包んでゐた。病間には先刻から居殘つてゐた大瀧と母親とたつた二人きりで、お互に口を噤んだ儘折々不安な瞳

を据ゑて俊子の顏を偸みみてゐた。そのなかで俊子は絶えず氷嚢の陰から切なさうな呻めき聲を洩らしながら、母親のことや、毅のことや、良人のことなぞを取留めない譫語に云ひ續けてゐた。――松倉一家の運命も希望も絶望も凡て死に瀕してゐるこの俊子の一呼一喘に繫つてゐるやうに見えた。

おりゆき



それから三日ばかりの間、俊子は全く死と生との間に彷徨してゐた。少し肺の方が開いて來たかと思ふと恐ろしい血滯が來て、容體は常に一昂一低でまるつきり定まらなかつた。立會ひに招がれた大學の博士達もこれ以上盡す可き手段はないと云つて、漸う絶望の色をみせて來た。

その日は朝から小雨が降つて、底冷えのする妙に陰鬱な日だつた。麻布の叔父は憂慮の餘り自分の仕事も放置つてしまつて、毎日毎日松倉家の事ばかり奔走して歩いてゐたが、その日も丁度日が暮れると直ぐに忙しさうな恰好をしながらやつて來て、茶の間に入ると突然長火鉢の前へしよんぼり坐つてゐる母親をつかまへて、

「何うです、容體は？」と口癖のやうになつてゐるその言葉を繰返した。

母親は何か深い物思ひに沈んでゐたと見えて、吃驚して顔をあげながら、

「何うも相變らず熱が退ないんで困つてゐるんです。」と力のない聲で答へた。

「矢張り駄目ですかなあ。昨夜大瀧さんの話ぢや少しは持ち直したやうな樣子だつたが……。」と叔父は失望に顔を暗くしながらその儘火鉢の向ふへ腰を卸ろして袂から卷煙草を取出したが母親は勢ひのぬけた眼を態と逸らして、

「大瀧さんは私達に安心させようと思つていろいろな事を言ひなさるけど、私には今度はもう迚も助からないやうな氣がしてなりません。今朝なんかひとしきり息も何にもしなくなつてしまつたんですもの。」と涙含みながら呟いた。

叔父は答へる言葉もないやうに默り込んでしまつたが、暫らくすると强ひて聲に力を入れて、

「併しまあさう一途に思ひ詰めてしまつても可かんでせう。今日明日が大切な處だと云ふからひよつとして今夜にも分利する兆候がみえんとも限らんですからなあ。」と云つて話題を換へながら、實は昨日もお話して置いた通り昨夕田中といふ男を此方の代理人にして津崎の方へ懸け合はせてみたんですが、その返事が今しがたやつて來ましてな……。」叔父は煙草の煙を深く吸入ながら言葉を切つた。

母親は今の場合そんな事は何うでも可いと云ふやうな顔つきをしてゐたが、やがて力めて、

「何うもいろいろお世話をかけて濟みませんでした。何か變つたことでもありましたか知ら。」と浮の空で訊ねた。

「いや、昨夜の會見では格別取留めた話も出なかつたやうですが、何しろ彼方も今が必死の場合ですから案外腰が強い樣子でな。それに困つたことには原田から杉浦の方へも何か强硬な談判を持ちかけたらしいんです。」

「まあ、杉浦へもう・」母親は呆れたやうに云つて、「私もそんなことになりやしないかと思つて心配してゐたんですが、そんな事をされりやもう彼處へ對しても顏向けが出來やしません。殊に彼處は昔から有名な堅い家ですから、ひよつとしてお母さんの耳へでも入つたら毅さんは何うなさるだらう。まあ飛んでもないことになつてしまひましたねえ。」

「いや、併しそれもまだ確にさうと斷言する譯にや可かんですが、どうも田中の見た處では原田がもう既に一度や二度は毅さんに逢つてゐるらしいんです。

そつちの方の話もよく確めてみたいと思つて、今日はその手段に懸つてゐるんですが、かう問題が複雜になつて來ちや迚も並大抵な事ぢや納まりが付かんかも知れんですなあ。」と云つて叔父は嘆息を洩らした。

二

「田中もさう云つてゐましたが、第一あの原田と云ふ奴が可けないんです。何でも文書僞造かなにかで牢へ入つたこともある奴ださうで、中々一筋縄でいく奴ぢやないんです。彼奴が中へ入つとつちや誠に談判がし難いと云つて、田中も酷く零してゐましたが、と云つて津崎の方へ直接に懸け合ふ譯にもいかんし實に此れには弱つてしまつたですなあ。」叔父は眞から當惑してゐるやうな顏をして云ひだした。

「私も原田のことは聞いてゐますが、彼の男に懸つちや迚も駄目です。始終人の弱味へ附込んぢや惡い事ばかりしてゐるんださうですからねえ、正面から懸つて行つちやきつと敗かされてしまうに極まつてゐるんです。」母親は絶望し

たやうに云ひながら深い思ひに沈んでゐたが、暫らくするとまた顔をあげて、「何うてせう、俊子もあんな身體になつてしまつた事ですから、いつそ思ひ切つて先方の云ひなりに金を出して、この儘後へ蟠りの殘らないやうにさつぱり緣を切つてしまつては。いつまでもかうして懸り合つてゐたら何んな事になるか分りやしませんもの。それに俊子に萬一のことでもあると、あの子の後々まで恥を殘すことになりますからねえ。」

「いや、それも一つの方法には相違ないですが、併し折角此處まで此方の云ひ分を立てゝ來たのですからなあ、今先方の云ひなりになつてしまつちやまるで形なしです。つまり姦通なぞと云ふ怪しからん云ひ懸りもさうすれば有乎無乎の間に此方で承認したことになるし餘り殘念な話ぢやありませんか。」

母親は默つてそれには答へなかつたが、やがて身を切られるやうな聲で、

「そりやもう已むを得ますまい。それに貴方は大層俊子の肩をお持ちになりますけど、私には何うしてもあの子を信用することは出來ません。今度の事だつて決して根も葉もない拵へごとぢやないやうに思はれるんです。もうかう

なつた上はお隱ししたつて仕樣がありませんから、ずつかり打明けてお話し致しますが、あの子は昨夜から毅さんのことばつかり云つてゐるんです。」

「そりや譫語でせう。あんな大熱のある病人の譫語なんかを一々取りあげつちや限りがないです。」叔父は笑ひながら取合はないやうに云つた。

「いゝえ、譬へ譫語だつてまるつきり心にない事は云やあ致しますまい。十歳や十五歳の子供なら何ですけど、もう分別のある年をしてゐる人なんですから譫語だと云つて聞流してしまう譯にはいきません。それに何とも思つてゐない人のことをあんなに云ひ續けられる譯がないぢやありませんか。」

「併しそれ位な事を證據にして俊子の節操を疑ふのは餘り酷な話です。子供の時代からあんなに親しくしてゐた人のことですもの、熱に浮かされて少しぐらゐ云ひ過ぎたつて別に不思議はありやせんぢやありませんか。第一私には嫂さんがそれ程までにあの俊子をお疑ひになる譯が分らんのです……。」

叔父はかう云つて母親を相手に云ひ募らうとすると、その時玄關の方で呼鈴の音がして誰れか來客のある氣勢がした。二人はその聲に驚かされてふつり

と口を噤んでしまつた。

三

暫らく經つと玄關の方からお初がそゝくさ小走りにやつて來たが、茶の間の様子を見て取ると遠慮深い眼つきになつて次の間へ手を突きながらそつと覗き込んだ。

母親は待ち兼て、

「誰方かお客様かい？」

「は、あの杉浦様の若旦那様がお越しになりましたが……。」

「え、杉浦さんの？何誰だい、毅さまかい？」母親はその咄嗟ひどく顏色を動かしながら云つた。

「はい、毅様で被居います。」と云つてお初は母親の方を見上げながら、「何方へお通し申しませう。」

母親はそれには答へず、いつにない慌たゞしい様子をしてその儘起ち上つて

自分から玄關の方へ出て行つた。

玄關へ來てみると、薄暗い式臺の處に毅がたつたひとりでしよんぼり突立つてゐた。眞黑な外套をすつぽり着て、うす寒さうに肩を竦めながら靴先でこと〳〵と三和土を蹴つてゐたが、母親の姿が見えると慌てゝ帽子をとつて挨拶した。

「被來いまし。さあ何卒此方へ。」と、母親は妙に改まつた調子で迎へたが、毅は唯輕く頭を下げただけで、無言のまゝ靴を脱いで、ついと玄關へ上つてきた。そして案内されるまゝに母親の後について、眞暗な階子段を二階座敷の方へあがつていつた。

暫らくの間はお初の手で火鉢が運ばれる、茶道具が運ばれる、間内がざわついて碌々挨拶も出來なかつたが、それが靜まると毅は母親の顏を眞面に見ながら無雜作な聲で、

「俊子さんは此頃此方へ歸つておいでださうですなあ。ちよつとお眼に懸り度いのですが、只今お宅ですか？」と云つた。

母親はその聲が意外に落着いてゐるので不思議な思ひに打たれながら、

「居るには居りますが、實は少々不鹽梅で寢んで居りますから。」
「御病氣ですか？　いつから？」毅は俊子の病狀を少しも知らないと見えて變な顏をしながら聞返した。
「四五日前から急に肺炎に罹りまして、どうも今度は少々難かしいやうなんで御座います。」母親は毅の顏色を讀むやうな眼つきをして云つた。
「えッそんなにお惡いんですか。そりやちつとも知りませんでした。」毅は態と驚きを押隱すやうに聲を落として云つたが、抑へきれぬ憂慮はみるみる彼の蒼ざめた顏一面に浮んで來た。
母親はそれを見ると厭な顏をして、
「どうも種々に手を盡くしてみましたんですけど、一向に甲斐が見えませんで、今に熱が少しも退きませんもんですから。それに此の前の病氣からこのかたまだ眞箇の體になつて居りません矢先で御座いますから、ひよつとして若しもの事がありやしないかと思ひましてそればかり心配して居りますんです。」と、相手の心を刺衝せずには置かないやうな調子で云つた。

「そりやさぞ御心配でせう。そんな事とは少しも知らなかつたもんですから、お見舞ひにも上りませんで。」毅は追ひつめられたやうな苦痛の表情を浮べながら俯向いてしまつたが、やがて衣嚢から金口の煙草を取出して慄へる手先でそれへ火を點けた。
二人は話の手蔓を失つたやうにその儘少時の間默つてゐた。

四

やがて母親は居坐ひを直して、聲の調子まで何處か改まりながら、
「何か俊子へ急な御用でもおありになるんで御座いますか？」
「えゝ、一寸御目に懸つて伺ひ度い事があるんですが……。」と、毅は氣拙い顏になつて、併しそんな御容體ぢやお眼にかゝつた處が仕樣がありますまい。」
「はあ、迚も今の處お眼に懸らせます譯には參りませんのですが。醫者からも堅く止められて居りますもんですから。」と云つて、さあらぬ顏で、「何の御用ですか存じませんけど、若し私が伺つていゝんでしたら伺つて置きまして、後で申